も十字架下ろしがある。此は先のよりも一層説明書風で、細く美しくはあるが、大幅には適しないと信ずる。部分々々をとつて見た方がよからうか。この書幅の縁の聖者は實によい。大幅の聖母像の周圍に出てをる一々の聖者が小く現はれて、一つ〳〵立派な肖像書になる。聖者に關して特に注意を引いたのは、アンジェリコがその派の祖師ドメニコと伴つて常にフランシスを書いてをる事で、フランシスのないのは恐らく二三幅(フヰエソレのにはない)であらう。彼れが如何にフランシスを尊信したかを知るに足る。

アカデミーは歴史研究のために又その便宜に出來てをるので、その中に行くと、見方も考へも自ら批評的又は分析的に傾く、フヰエソレの寺の拜堂やサンマルコの僧院の壁で見れば、見方も自ら崇拜的になる。嗚呼アンジェリコは歴史家の分析にとて此等の書を書いたのでなからう。然し研究の上には分析も亦已むを得ない事である、只分

析批評のために、總合同情を忘れる事のない様に、獨りアンジェリコに對してばかりでなく、何事の研究にも心がけたいものである。

トスカナ派の室にジオットーの聖母が、その師匠のと並んでをる。ビザンテン風を脱しない、少し角の取れぬ書の様に見えた。ジオットーの特色はやはり活動の生命にあるかと思ふ。

元のアンジェリコ室に返つて、復習的に巡見してアカデミーを出ると三時を半ば過ぎた。今日は中食を廢して書の前に滿腹の樂みを得た、毎日こうなし得れば好都合と考へる。

夕暮には又アルノの河端に寫眞を買ひに行つた。特に嬉しかつたのはフランシスのフヰオレッテ(Fioretti)の古色の皮で製本したのを製本師の店で買つた事である。その店には、古の通りに徒弟を使つて一々製本に意匠をこらしてをる。斯ふ云ふ事の好きになつたのはラスキンの御蔭である。

四月廿二日。　僧房の壁畫、高臺の夕日。

今日はサン・マルコに一日と定めて、朝飯後直にそこに行つた。天氣も稍回復して、古僧院の中庭に日光が照り始め、草原のマルグリテの花も頭を上げて咲き匂ふ。廻廊の十字架とペテロとを瞥見して直に段を上つて、僧房の間に入り、その七號室にキリストの忍辱の前に立つた。崩黄地の衝立を後にして深紅の墳に坐つた白衣雪の如きキリストの姿、一見しても萬鈞の重みがある。兩の肩から垂れた白衣、玉を手にした左手の袖、膝から下寛かに弘く擴がつた白衣の裾、微動だに見せぬしとやかな重味。これだけでも已にその衣の主の動かぬ心、磐石の威嚴を見る事が出來る。仰いでその面を見れば、巾にしばられた面、閉ぢた兩の眼にはどこまでも忍受不動の靈を表はして、巾の白紗を通してかすかに見える。白紗のしばりに屈せぬ隆鼻と、その下に威儀堂々の鬚髯の間に著しい朱唇と共に忍辱不撓の

心を見せる。荊冠を繞ふた金髪の頭にはは赤十字の光輪を後にして、その光輪の邊にはこの不動の人を辱めて心を亂さうとする色々の手が出て、或は棒を以て光輪を打ち落とさうとし、或は肩の上に威かす手つきを示す。その諸手の尚横には一人の黒奴の頭が現はれて、その尖つた口先から罵詈のしぶきを漏らしてをる。それらの辱しめには微動だにせぬ白衣の姿は、その右手に世界支配の棒を直立に持ち、左手には世界の珠をさゝげて、威嚴ある王者も及ばぬ威儀を示してをる。然しその威嚴は得意傲倨の威嚴でなく、忍受の頭徴に右に傾いて、抵抗もなく、辱めの中に靜かに落ちついてをる。此の如き威儀は實に世界通常のと全く別で、人汝の右の頬を打たば、又汝の左の頬を出せ」といつた人、而かもその人は「我已に世に勝てり」と宣言して、その宣言を實にするために一身を殺さうとする人の威風尊嚴である。

多くの人はこのキリストの頭を圍む空中の手や頭を見て奇妙とのみ見やう。萠黄地の衝立の前に、胴體も腕もない手が出て色々侮辱の手ぶりをし、胴體のない頭だけが表はれて罵詈のしぶきを放つなど、到底寫實的の美術家には考へられぬ事、只肉眼で見る事だけを事實とする人には怪異と見えやう。アンジェリコといへども必しも事實形體の手が空中に出、客觀の首が虛空に飛び出すと考へたのではない。その證據にはアカデミーにあるキリスト一代記の細畫には現に同樣の忍辱を畫いて、侮辱を加へる人間の身體を頭から足先まで畫いて居る。然し彼れの考慮が增すに從ひ、技倆の進むに從つて、彼れの信仰は單に形體の侮辱を忍受するキリストを見て滿足しない樣になつたに違ひない。そこで彼れは客觀の侮辱を形體で畫く代はりに、主觀に訴へた侮辱、キリストが靜かにその心に受けた亂暴をこの幅に表はさうとした。その上彼れの畫師としての眼に訴へ

ても、侮辱を加へる人間をゴラ〳〵その邊に畫いて了ふと、中心になつて居る肝心のキリストに對する注意の集中を害する。彼はそれを避けて侮辱を忍受するキリストの內と外とをこの幅に表はしたに違いない。古から多くの人がこれと同樣の景を畫いたが、一一忠實に周圍の人物を畫き擧動を盡したため、その畫はキリストをかくよりも、それを辱める一場の芝居を畫き出し、キリスト自身の忍受よりも他の人の侮辱を題目にして了つた。その結果は又キリスト自身の偉大な人物を害して、忍受不動でなく、辱めに困まり、亂暴に苦んでをる人物として了つた。パリにむるコレッジオの作でも、近頃のホフマンのでも皆此くの如くキリストの人物を小くして了つた。キリストのこの忍受は、その初めの誘惑退治と相對して、その一生の始終をなすものである。その大切の光景にキリストの困惑の姿を畫くのは實にキリストを畫いて而かも眞のキリストを畫かないであ

る。アンジェリコの圓熟した信仰と心眼とはこの一幅に依つて、眞に忍受のキリスト、一死最後の勝利に近よりつゝあるキリストを畫き出した。

忍受の中に不動の威儀を表はしたキリストの前には二人の聖者が居る。一人は聖カタリナ、さすが婦人の心にはこの侮辱に心を痛め、それを見るに忍びないで、少し眼を背け、而かもその右手を少し上げて、侮辱に對して何かの防禦でもしたい樣の心根を表はす。それと相對した聖ドメニコは流石に一宗の開祖、敎會の學僧、少しは安からぬ樣の心持を手つきに表はしながら、本をひろげて眼をその方に向けてをる。忍受の大君主を中にして、下に二人の聖者の對照。その配合を見てもアンジェリコが偶然に色々の聖者を配合したのでない事を示す。（尙色については十字の紅と、後方の崩黃とキリストの白衣と、下の聖者の中、カタリナの薄茶と、ドメニコの黑白との著しい

忍受のキリスト（アンジェリコ筆）

（一四五頁參照）

配合があるが、此は筆に及ばぬ)。

この幅のキリストの顔は半ば白紗で蔽はれてをるが眼も鼻も白紗を通して明かで、その忍受のおちついた顔は、キリストの肖像と見て最大の作であらう。レオナルドが最後晩餐の下書きにしたキリスト(ミラノのプレラにある)も、一つの肖像と見て稀有の作であるが、その悲愁に一種の柔かな調子がありすぎる。(それについて一つ奇談がある。前に曾てこの畵を雜誌に出すために寫眞を活版所に送つたが、校正の時に「洗ひ髪の女の眠つてる畵」はどこに入れるかと問ふて來た。これが活版小僧のキリスト觀ばかりでなく、レオナルドにしては柔かすぎる)。アンジェリコのは飽くまで忍受の表現で而かも森嚴な威風を具へ、此れこそ遭難當時の眞正のキリストであらうと思はれる。

このキリストを心の中に納めて、次の僧房(第八號)にある昇天のキ

リストを見た。屍體を納めた棺の空なのに驚く衆人の上、雲の中に光を放つて虚空に上るキリスト、漂渺として天に昇る靈のキリスト。こゝには忍受の顔と全く違つて、眼は少しく上の方を見つめ、毛髪が風に稍動くかと思はれる。忍受の像と同じ白衣(惜いかな色が少しよごれた)ではあるが、彼の像で裾が重く垂れたに反して、此には裾は雲の間にあるともないとも分からず、白雲の間におのづからふわりと上に上る様に見える。

この二つのキリストと並べて、變貌(第六號)のキリストを見る。その顔は昇天のと同じであるが、眼は嚴かに下に居る人々の上に注いで、彼等にその靈の形を示現する姿。足は尚地上についてゐるが、兩腕をひろげ、白衣を寛かに擴げた姿は、身體衣服共に透徹の玉かと見える。

この三つをつゞけ見て、一緒に考へると、實にキリスト像の絶大の

三幅對である。變貌光耀の身を示現した師主、忍受不動の大威王、最後に昇天靈化の神靈。神と人との融合を三幅に表はして、而かもその人を見れば事實の人から寫生をした肖像畫の如く活き〳〵してをる。アンジェリコといへども始終キリストを同じ顔貌で見たのではない(下に說明する如く)。然しこの三幅ではどうしても同じ人物、同じ肖像而かもそれがその場と心持ちとに應じて各々違つた表情を活き〳〵と示す。始め少し見ては、各々顔容まで違つてをるかと思つた位であるが、よく注視すると、どうしても同じ肖像で、それがその場の表情で非常に違つて見える。こう考へて見ると、單に肖像畫家として見てもアンジェリコの技倆の驚くべき事が分かる。いつも同じ眼つきでビスマルクを畫いたレンバハなどは、アンジェリコの前には肖像畫家といふ名を棄てる必要がある。

又八號僧房の昇天圖に歸つて、キリストの下に在る人物を見る。

石棺の緣に輕く腰をかけて片手を上に、昇天の人を指してをる天使の姿、その實明で無邪氣の顏つきに、何事かを云ふ樣な而かも無言の口つき。俯して棺を見るマリア、沈思して半ば棺の中を見やうとするに似た聖母、その横に尙愁眉を開かぬ二人の婦人。その表情と姿とは、會議室の三婦人の悲嘆と相對して、又別種の人生を畫き出す。尙一つ天使の後に僅に首を出した聖ドメニコの横顏は、廻廊の十字架の下のと同じ人で、而かも眼と頰の肉と口のしまり樣とに、深い喜びと渴仰との完全な表情になつてをる。

この三幅對の白衣のキリストを全く天上に上して、そこに同じく白衣の聖母を配合したのが、九號僧房にある聖母戴冠。この前にも大分見たが、尙熟視すると、こゝには天空の世界が如何にもよく出てをる。それとも分かぬ三彩の虹に似た光輪に圍まれた中には白雲淨光の世界。そこにキリストが寶冠を聖母の頭に戴かせる。聖母

は兩腕を胸にあてゝ愼んで之を戴かうとする。雲の下、地面に跪いて此の靈界の出來事を嘆美してをる聖者には、先づ前に聖フランシスと聖ドメニコと相對し、フランシスの後には殉敎者ペテロ、聖マルコ、が並び、ドメニコにつゞいては聖ベネデクトと學僧トーマスと。此等の聖者の顏も、會議室の十架下ろしを見たものには直に誰れ誰れと分かる。而してその表情の慇嘆も亦遺憾ない。

この幅のキリストを見ると、廻廊で巡禮姿のキリストと同じで、先の三幅對のとは自ら違ふ。此は疑問であるが、いくら見てもこの二種類を同一の顏と見得るまでに至らぬ。アンジェリコも微頭微尾同じキリストばかりを見たのでなからう。

聖母の容貌に至つては、向きは違ひ表情は違つても、廊下の告示の聖母と同一の人。然し二つを比較すると二所での場合の違ひが明かに見える。告示は聖母の一生の始め、戴冠はその完成。信仰の眼から

見れば不老不死の聖母は其間に決して年はとらぬ、然し一つは人間の生活から神靈の生活に入る始め、一つはその大成。告示のマリアには喜びや服從と共に驚きの情がある。この情はその眼つきにあらはれてをるのみならず、その口の少し開かんと欲する樣にも、又胸に當てた兩の腕が寛かにふはりとした手附きにも見える。然るに戴冠聖母の眼は立派なおちつき、恭敬の中に感謝を湛え、威嚴の中に滿幅の歸敬を注いでをる。その口のしまり、その腕が固く胸についた態度は、共にこの眼つきを補つて、神の母、女性の王の實を現はし、戴冠に臨んだ久遠の女性を筆の跡に表はす。告示のマリアは一人の無垢の乙女、この戴冠の聖母は久遠の女王。僧房と廊下とを往復して感嘆の中に見た感は此の如くである。

午食の時になつて人も少くなり、常には人の往來の絶えぬ廊下にも人影が絶えた。廊下の壁にある聖母子の前に坐り込んで尙も嘆

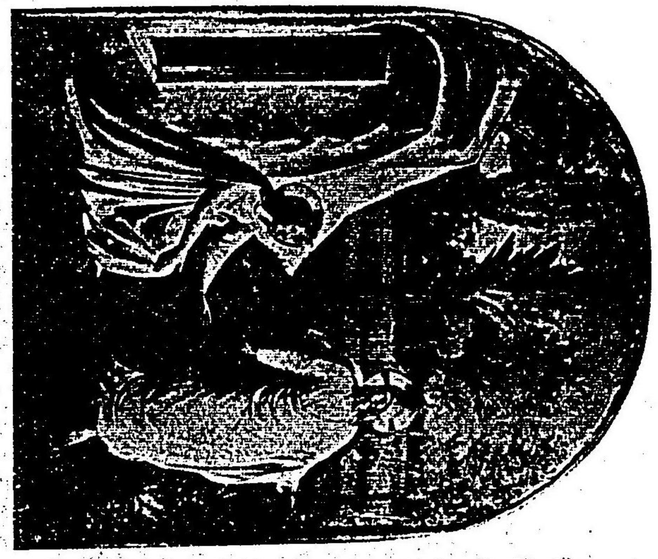
美をつゞける。この聖母の愛、威儀の具はつた子の無邪氣さ。神々しいといふよりも人情の至醇を壁上にかくまでもよく現はし得たかと思へる。兩側の聖者も各特色もあり見所もあるが、中央の聖母聖子で十分である。色合が割合に華やかな聖者の數々は暫く取り去つて主の人物のみを見る。純紺の聖母の衣と、紅白の愛らしいパンピノとの色合のみでも十分である。「火は小なりと雖も悔るべからず、王子は幼なりと雖も威儀犯すべからず」との佛陀の言を想つて、自分は此の畫を「王子の聖母」と名づけたい。

三時に近くなつて人がそろ〳〵來始めた、廊下を避けて一號の僧房に這入る。此處には復活の朝があある。木の葉は綠に茂り、竹の垣根に限られた庭生の草原には紅白の花が亂れ咲いた春の晨朝。戸のあいた岩窟を出で輕い歩みのキリスト。その後に跪いて驚き且つ慕つて、その歩みを留めんとするマリア。薄紅の衣の裾は青草の

上に柔かにひろがり、その手は先に行く人の衣を捉へやうとするに似て、兩の眼を半は肉、半は靈の師主に注ぐ。キリストの姿は、行きかけて歩みを留め、輕く胸から上を後に返して、背後の人を顧る、その眼には、憐愍の光りを放つ。肉體のキリストを追はずに靈を見よとの意味であらう。この兩々相對する人情と、春の晨の青々と活き〳〵した天然と相合して、宗教と抒情詩と合一した趣を呈する。但しこの塲のキリストが昇天のキリストよりも戴冠のキリストに似て、且つ稍老年に見えるのは自分にはまだ了解出來ない。

次の僧房(二號)には、キリストを十字架からおろした景。表情はガレリーにある十字架おろしの如くに變化はなく、人々が皆愁傷の情をもつて、キリストの屍體をいたはる。色合も簡單に、筆つきも密畫風でなく、勢があり力がこもつて、一幅に一層のおちつきがある。右には岩戸がある。その左に山林が開け、そこから聖ドメニコが出て來

(一五一頁、一五二頁參照)



復活の朝ぼらけ(アンジェリコ筆)

キリストの葬り(同上)

受胎告示（アンジェリユ筆、聖マルコ第三號僧房）

（一五三頁參照）

てこの人々の上に同情の眼を注ぐ。その立つた姿は、その手に持つ白百合の花と共に淨く尊い。こゝにもアンジェリコは又山水畫の技倆を示してをる。

隣の三號僧房の告示は又一種特別のもの。淡褐色の壁と穹窿とに圍まれた僧院の廊下に、威儀正しう立つた天使ガブリエルと、その前に跪いた細腰の一人。その他には天使の翼の後に半身を表はした殉教者ペテロの外誰も居ない。廊下の告示でガブリエルが跪いたに反して此處のは直立、その翼も五彩でなく簡單な强い色で、それも擴げたといふよりは重く垂れ、廊下の天使には喜びの情が溢れるに反して、こちらのは、威嚴を整へて見下す眼。その前に跪くマリアは此處では乙女でもなく、男でもなく、又廊下の様に喜びと慌きとの情でなく、謹嚴な服從、無言の歸敬のみを現はす。その姿は細身風に描えぬ様で、而かも薄紅の衣の身體に沿ふて垂れ、身を前に傾けた様は、下か

ら上に見上げると不可説の神々しさを示す。その腕は固く胸にあて、口はしまつて、殆ど戴冠の聖母と同じ表情。その横顔には、云はば大事をひき受けた大勇猛の決心を示す。思ふにアンジェリコは聖母の告示を受けた時には、その一生の大事、一期の大悲惨事のあるを豫想すべきといふ信念からこの幅を畫いたのでなからうか。廊下の告示には母となる喜びがあり、こゝの告示には一生の大事を引き受け、一念その告敕に服從して身を擲つ人の決心がある。彼れも告示の一面此も亦一面。アンジェリコの信念が決して固く眞理の一面だけに拘泥したものでない事が此處にも分明する。

かく見て、僧房と廊下との間に往來して兩方を比べると、この感は一層深くなる。若し世に超世の人、所謂る超人があつて、男でもなく女でもなく、ワグネルの所謂る純人間 reinmenschlich な無垢の性情を持つて、而かもその人が自分を棄てゝ大事の命に應ずるならば、その

人の至情はこゝのマリアに表はれてをる。高潔、雄大、端嚴の相は大きな人物や大きな歷史にのみ現はれ、大幅にのみ畫かれるものでなからう。

四時の閉館も近づいた、眼もくたぶれた。この告示のマリアを眼に印して、目を半ば瞑して外に出、宿に歸る。そこらの人の顔がアンジェリコの畫いた人物に比べて、如何にも野卑に見える。然しそれ等も見ない樣にして宿に歸つて尙瞑目し沈思した。

夕暮れ前の散步には、丘の上のアンジェロ廣場に行つた。晴れ亘つた、空の碧色がすき通る樣に、その紺青色も下になるに從つて白くかすみ、その間に靑黑いシプレスの木立が天をつく。臺下の畑にはォリヴの薄黑い靑色の下に新綠の草原。その草原の先は宮殿の散見する丘。いくつも丘陵を越えて遠い山々は紫紺靑の夕暮の色を染め、その先は白雲の峰に盡きる。山の間にうね〳〵と光るアルノの

流れ、水の上のフヰレンツェの町、堂母のみはその間に厳然と聳える景、晴天の眺には又晴天の開濶な調子がある。

遠の山々の紫紺青は愈々紅を帯び、近い丘にも夕暮の色がかゝり、ミニアト寺邊のシプレスを越して西の山々は黒い影のみを殘す。臺を下つてアルノの河端を歸る。河に沿ふた宮殿作りの家の鐵柵に藤の花が咲き揃ふてをる。ルチサンスと有職模様との調和は、美術家に先つて天然が試みてをる。古橋の廻廊のアーチに日が沈んで深紅の金光を放つ。その色と光とは到底人間の筆には上らぬ。天然の活畫は又その特別の趣を持つ。

宿に歸つて食後、今日の一日を回顧する。アンジェリコが神靈を見て畫いたキリストの様々、復活の朝の天然。アンジェロ臺の眺め、その空色、山々草原。皆一つになつて心は洋々たる浄光の天に遊ぶ。アンジェリコの如き畫聖も決して空に畫いたのでない。彼れの畫いた

風景は、アルノの谷、トスカナの山そのまゝではないか。アンジェリコも亦忠實な寫實家であつた。然らば彼れの畫いた神靈も亦空でなく影でなく、事實、實物ではなからうか。

四月二十三日。 フヰエソレ、僧院と聖母。

今日は先づ殆ど終日春光の天然に浴してすごした。今日フヰエソレの一日はフヰレンツェ滞在の最後の日として恰好の紀念とならう。

きのふに増しての晴天に、朝飯後直にフヰエソレの丘に上つた。きのふからの暖い日光に木々の若緑は一層萌え立つばかりで、草花も此の間よりも多く咲き亂れてをる。黄色の蒲公英、雪の如き傘花、マルゲリテ、數々の中に野げしすら處々に咲いて深紅の色をその間に點ずる。時々はこの邊りにも散歩したであらう、アンジェリコは此等の花に天使の足跡を見たであらう。

千々の花よろづの草に咲く丘に

今も住むらん神の御使。

ドメニコ僧院の前も過ぎて、山路の見はらし下に開け、上を見れば
シプレスの木立が深山の如く、碧空に浮ぶ白雲の切れ〳〵がその深
緑の後から出る。石段を上つてフランシスカン僧院前の臺からア
ルノの谷を眺める。同じ山河ながら此間の曇りと違つて、眩いばか
りに日光に照らされた萬緑の山河、その中に群がるフィレンッェの家々。
石に腰かけて茫然といつまでも眺める。

風光三昧の靜けさも陸軍信號隊の作業に破られて、兵卒の往來信
號のカチ〳〵。その見晴しを去つて僧院前の草原から此間も見た
ロマの古跡を眺め、今度は僧院の戸をたゝくと、褐衣繩帶の僧が迎へ
てくれた。井戸の眞中にある廻廊作の中庭に僧院生活の簡單なの
を忍び、それを過ぎて庭に出る。菖蒲の畑に次いでシプレスの林、そ

の先に山の崖につき出た眺めの弘い草原には、小さな星の様な露の
花が咲きも咲いて、宛然アンジェリコの畫いた天國樂園の畫。それに
日の光が副ふて、熙々たる春光の別世界を作る。咲き亂れた白い花、
その間に默綴する紅の花は日本では風露草の種類、イタリアの名を
問ふと、ジェルソミノ(Gersomino)だといふ。通常のジャスミンとは全く違
ふが、此も此の院のジェルソミノとして見やう。その紅白の間に恥か
しげに隱れた樣に咲く薄紺の花は忘るな草。處々にサフランの花
の秀てをる外はこの三色の花が草原一面。

ジェルソミノ白紅に咲く中に

我れ忘るなと紫の露。

此處で暫く休ませてくれといつたので僧は去つて僧院に歸つた。
獨で花のしとねの上に寢て春の日光に浴する。時々吹く軟風は頰
を掠め、草を摩でる。和らかい微風に花の動く樣は露か玉か、草を枕

に眺めると、世界は全く風と花との天國。

草の床ふす枕邊の春風に
さゝやきなびく花の白露。

正午に寺々の鐘が山の上下、里の遠近にひゞき、碧空に鳴り亘る。其後は又元の春光の寂靜世界。聖フランシスがトスカナの野、オンブリアの山に風を賞で花を詠じて神の德を謝した心根も偲ばれる。

草木もかふる御惠に　神をたゝへしいにしへの
ひじりの跡に春は來て　咲きも咲かせし千々の花。

一時間もたつたであらう、草の上にねて後、立ち上つて見ると、ねて居た場の花や葉がしき伏されてをる。憐れな樣でもあるが、又ゆかしい橫臥默想の跡。花を澤山摘んで一つの花たばを作つて殘りおしくその場を元の僧院に向つて去る。

人の世に天の使のあと忍ぶ

かたみにも摘まんフヰエソレの花。

僧院に來て見ると僧の影も見えぬ。その人を尋ねて靜かな廊下をたどり、西の方の窓の下に出る。その窓からの眺めはこの僧院幾百年の間に幾多の修道僧が人の世を眺め下した風光である。他の僧に會つて禮をして僧院を出ると、その僧は戸口まで送つてくれ、互にアルヴデレをいつて別れた。

忘れ難い僧院の印象をくり返しつゝ山を下る。石垣の間の石道、別莊とシプレス木立の道、全く畫の世界である。半腹まで下りて聖ドメニコの僧院を音づれると、此の間の僧が出て來て、鍵の音高く戸をあけ、アンジェリコの聖母に案內してくれる。前の經驗で知つて、僧は珠數と鍵との音をさせて去つて行つた。跡には又寂寞の堂內に寂默の想に沈んで聖母の前に立ち、その神々しい母の姿、乙女の姿、それを圍む天使の衣紋、羽翼の美はしい色々、聖者の顏容、背景の山水、眺

め通し眺め返す。この聖母には他の作に勝れて母の愛と處女の無垢な姿とが完全に調和してをる。母の資格と處女の德と、世間の通常では兩立しないものが一つになるとは、實にアンジェリコの神筆で示される。今の西洋には子の愛育よりも夫と同伴の溫泉旅行でも樂む婦人が多い、日本にもその風が大分移りかけてをる。その結果產兒の制限なども行はれて、フランスでは社會の大問題となつてをる。人間としては夫なしに子を產む母はない、然し母としては身を子供のために捧げてほしい。子供の撫育がその父に對しても最大の義務であり、自分にとつては身に代へられぬ樂みであつてほしい。處女の德は偏執のない心根、私情を離れた愛情、世の美はしい事を素直に受け、人生の愛を純粹無垢の至情に味ふにある。日本ではこの德が中將姫、伏姫に仄かに現はれてをる。その處女の德に獻身の精神 devotion の力を加へて、至情を子に注げば即ち聖母の姿は現はれる。

肉體ではこの二つが兩立しないにしても、その肉體の制限以上に、精神にこの二つの德を具へた婦人があれば、その人は即ち聖母の片影を人生に傳へた人である。自分は色々の聖母像を見る毎に自分の母を思ふ、聖母の像には自分の慈母の顏に似たのが多い樣に思はれる。トールーズの大寺の石像聖母には全く慈母の顏容を見たが、このアンジェリコの聖母にも何となう慈母の若い時に似通つた容貌のある樣に思はれる。敎會の宗義を嘲笑して聖母の崇拜を輕蔑する人々は如何に批評してくれても、自分は敎會の聖母崇拜には大きな福音を聞く事が出來る。

一時間餘もして番僧が出て來た。山頂の花を分けて聖母の像前に捧げ、蠟燭の代を僧に渡して寺を出た。

フォエソレに神見し人の筆の跡

母の御神に花たてまつる。

みあかしにさゝぐる蠟は盡きぬとも

寺の前から電車に乗る。瞑目してフヰレンツェに着き宿に歸つて追てらせこゝろに母のすがたを。

想すれば、フヰエソレの草花、ドメニコの聖母の姿、心は一種光耀の世界に遊ぶ心地がする。

時間があれば、ウフヰチの博物館にも行つて、尚アンジェリコやジオットを見やうと考へて居たが、行けば他の畫も眼に映る、ラファエルなども見たくなる、フヰエソレの聖母を最後の印象にしてフヰレンツェの見物を終らう。

あすはペルジアに、次はアッシシ。理想の聖母に代へて、世に現はれた事實の聖者の跡に立つのも二日の事となつた。フヰレンツェの七日も忘れ得ざる日數であつた、アッシシの五日にも亦不滅の感化を得たいものである。

シシッア鄉故の者聖

Intra Tupino e l'acqua che discende
del colle eletto del beato Ubaldo,
fertile costa d'alto monte pende,
Onde Perugia sente freddo e caldo
da porta Sole, e di retro le piange
per grave giogo Nocera con Gualdo.
Di questa costa, là dov' ella frange
più sua rattezza, nacque al mondo un sole,
come fa questo talvolta di Gange.
Però chi d'esso loco fa parole
non dica Ascesi, que direbbe corto,
ma Oriente, se proprio dir vuole.
(Dante, Paradiso,)

トピノの河と、神に惠まれしウバルドが
撰びし丘より流るゝ水と、その間に
高く聳ゆる山の麓、
ペルジアが寒さにも暑さにもその風を受け、
日の門より望み見る山、その後には
ノセラの山とガアルドの山と、重き軛を懇む。
この麓、峻しき山の野に迫る處、
こゝに日輪一つ世に生まれ出でぬ、
ガンガーの流れに出づる日のごと。
この地を語る人よ、
音にアッシシと呼ばずして
日の出の里と誠に呼べ。
(ダンテ、天國十一章)

聖者の故郷アッシシ

四月二十四日。 花の里から日の出の里、聖者の棺前。

このアッシシに來て、フランシスの棺から一町も離れない處で、その寺塔を眺めつゝこの手紙をかく。夕日が西の山端にはなやかな色を染め、遠の山々が影の如き間に包まれたオンブリアの野を下に見て、時々ひゝく寺の鐘の外に聲もないアッシシの地は人間世界を離れた處の樣に思はれる。年來の素願を達してこの聖者の故郷、聖者の亡き骸の安置した處に來た喜は譬へ樣もない。

朝フヰレンッエを立つたのは九時半。晴天の春霞に町を後にして、殘り惜しく堂母の塔を眺めた。

跡にするフヰオラの里の名殘には
かすみにしるき大寺の塔。

東の方に馳せ段々にアルノの上流、山々の間を上る。

神さへも見えては消ゆる世の常に
雪も近く見える。

ペアトの棲家山隱れけり。

空あをみ草は綠の山の邊に
しるくもしるきけしの一花。

ペアト・アンジェリコの棲家、フヰエソレの丘もかくれ、フヰレンッエも見えずなり、只野山の間を馳せる。地面は段々に高く。プラトーの山の白

野邊はるに燃ゆる綠を裾にして、
頭は雪のプラトオの山。

麥はたけ、日かげ照りそふ春の野に、
夏まちがほの葡萄木のつる。

野は高み、こゝ初春のしるには、

訪りかほにも咲く梨すもゝ。

アレッツォやコルトナなどいふ町が山の上に見える、山の頂に町を立て城壁をめぐらした山城の様。此等の町や城は度々の戦争を經て修羅の街を現はした跡である。

山の岨きづきし壁に生ふる苔、

幾代のむかし人の血のあと。

その中に山間の湖水のふちに出る。遠くアミアタやセトナの火山が見え、湖水の中島には、フランシスが四十日斷食にこもつた跡がある。尚山を上るとペルジア (Perugia) で、此も山の上に建てた古の町。次の列車までの間に一時間あるから、その間に見物して、今日一夜ペルジアに泊るつもりを、アッシシに急がうと思つて、直に電車で山の上の町にゆく。寺や市廳の建物のみならず町全體が全く何百年かの昔のまゝで、曲つた狹い町、屋根の下をくゞる町など奇妙な處である。

古のロマ時代の城門を見、それから一つ高見に上つて東北の山々や、この町の半分を眺める。丘の背に建てた町がうね〳〵として、それを圍んだ城壁は山の崖に臨んで立派な要害。この城壁の一角から山の下の谷間や遠の山々を眺めると、この町の固かつた古が思はれる。時間がないから直に引き返して、南の方の高臺から、此も谷間や山山を見る。此處から乘つてステーションに歸らうと思つた電車が來ない。時間も迫るから急いであるいて山を下る。直下に近く見えるステーションまで二十分と時間を勘定したが大間違で、二十分たつて半分餘りしか來ない。汽車の時間は迫るが、あせつても仕樣がない。乘りおくれたら又その時の事と覺悟して、やつとステーションに着いた。汽車が大分おくれたので、そのお蔭で間にあうて、二時すぎにアッシシに向つて出た。この汽車に間に合ふたのが奇妙に感せられる。

アッシシにひじりの跡を訪ふ我れを
待ちてのせ行く汽車こゝろあり。

汽車は東の方に山を下つてテベロの河の平原に出る。行く手に高い山、その麓に一つの町、日にてらされて著しく見える。よく見ると、豫て書で見て知つて居たアッシシの町、後の山はスバシオの山。この時はフォレンツェに入る時とは又別種の喜びを感じて、一つの理想世界を發見した様の氣がした。

名に戀ひしアッシシの都近づきぬ、
高根のすそに一むらの家。

見えても中々隔りはある、オンブリアの平野は遠くかすんだ山々に圍まれ、その間にいくつも河が流れる。それ等をすぎて三時アッシシ(Assisi)のステーションに着いた。そこから見ると、町は山の崖、その一方の突き出た角が即ちフランシスの寺。平野から見上げると忉

利天の詣などにありさうな景である。ステーションの側にもフランシスに緣の深い寺はあるが、それは後にして、宿の馬車で山路に上る。傍の麥畑、畔路の花、オリヴの畑、景色は外と異らぬが、フランシスの遊行した跡と思へば、そこらの野も草木も尊く思はれる。草を刈つてをる村人はその昔の聖者をどう思つてをるか。

村人よ、心して摘め野邊の草、
聖者のあとは年をへぬとも。

道は段々上りになつて城壁の下に沿ふて上る。古い城門の前に村のものが集まつて酒を飲むでをる。大きな瓶を柳行李の様なもので包んで(この邊の酒樽は皆この様にしてある)、その瓶口に赤い紙を貼つたのを二つ三つ小な車に載せ、耳の長い驢馬に車をひかせて、城門の下に立ちどまつたいけでも一つの畫になる。その上、馭者は赤い襟巻の大きいのを卷き、崩黃のづぼんをはき、車の下には黑い着

物に樺色の頭かけを着た婦人と、此も樺色の襟巻をした男と三人で小さな瓶から赤葡萄酒をついで、路ばたで酒もりを始め、面白さうに笑ひ興じてをる。七百年の前にもこの城門の邊りにはかういふ酒もりの光景は同じであつたであらう。次の城門を這入ると、狹い石道の町、間もなく宿につく。この宿はフランシスの寺の直隣りで、崖に沿ふた見はらしのよい家であるが、見はらしの方は皆ふさがつて居るので、町の方に向いた部屋に案内せられた。窓から見ると前は手のとゝきそうに向ひの家があるが、左には寺の前の廣場を隔てゝ寺の塔が直そこに見える。これから數日の間はこの寺の鐘をきいて朝夕を送り得る。

フランシスが御寺の鐘に朝夕を

おくらん幾日われ法の民。

ペルジアの急行で喉が涸いた。宿の緣側に出て茶を飲む。平野

山々の眺め、直隣りの僧院の眺め、皆この緣側に集まる。

茶を終つて寺に行く。小な石の門をくゞると、御堂の前の廣場で、兩方はアーチの廊下。石でつき上げたのみでフランシスが清貧の理想がゆかしく表はれる。本堂も簡單な入口。それを這入ると暗い穴倉の樣で、奥に聖經讀誦の聲がきこえる。案内のつけ纏ふのをふり棄てゝ、拜壇近くに坐つて經文をきく。その讀誦は他の寺と違つて歌の樣な節をつけず、全くの誦經で、殆ど佛敎の通りである。暝目祈念の後、目を開いて見ると、ジオットーが畢生の技能を盡くした壁畫が神々しく暗らがりの中に見え、堂の天井は弓形のアーチで四方から支えた所謂るヴォールトで、高くもないアーチが如何にも宏大に見える。西の窓から日光がさして雲の往來とともに照つたり曇つたりして壁畫が明暗隱顯の變化に、或は神聖に或は幽玄に見える。その間に誦經の聲は堂内に澄み亘つて抑揚波の如く、高く響いては

又微かに、斷えては又つゞく。終りに「主の禱」を唱へて僧達は默禱する。こちらも亦瞑目して聖者の靈を念じ佛を念ずる。默禱の後に又少し誦經を終つて、五人の僧が横の御堂で誦經し、最後に中央の拜壇即ちフランシスの棺の前に跪いて祈念して去つた。自分もそれと共に拜壇の前に跪き、僧等の去つた後に拜壇に近づくと、その石段のすきから地中に微かな燈明が見える。此が即ちフランシスの遺骸を納めた棺の前だと思へば、一層七百年の前がしのばれる。高野の奥の院は、處は幽靜であるが、弘法大師の前にはこれだけの歸敬の心は起らぬ。吉水の庵室、法然上人の廟はこれだけの奥ゆかしい場所になつてない。若し法然上人の遺骨が高野の奥の院の樣な處にあつたならば、このアッシジの聖者の棺前に似た心が起らう。日本では比叡山の傳敎大師の廟、西洋ではこのフランシスの棺前。傳敎大師廟前の水の音にこの御寺の地下の燈明。何れに對しても感涙の歸

敬を注ぎ、法喜の禮拜をなし得る自分は世界一の仕合はせものと思へる。傳敎廟前の泉は千古絕えず、聖者フランシス棺前の燈明は晝夜光を放つが、その遺弟にこの泉を汲む人、この光明を輝かす人、今の世に幾人ある。眞理の泉、信仰の燈、このまゝで涸れたり消えたりはしないが、その水を世に注ぐ人、その光を人に示す第二の聖者はどこに居る。拜壇に祈禱を終つて、去つて行つた褐衣繩帶の僧を見て、自分もその仲間入りがしたくなつた。

ジオットーの畫を見る人々が堂内にうろついてをるが、自分は今日は畫を見る必要はない。聖者棺前の燈明一つで十分。寺を出、廣場から又その塔をふりかへつて宿に歸つた。

宿でフランシス傳の著者サバチエ氏(M. Sabatier)に會つて少し話しをして、夕暮に、フランシス寺の前を山に上り、古い城門の石の間に黃色の花の咲いてをる下をすぎて、この町の墓地に行つた。その墓

地やその道からの眺めは宿の崖からのとは別で、後の山々、崖の下の谷、その谷川が山間を出る山角の上のフランシス寺と、その僧院と一目に集つて、その先は遠くアミアタの火山を雲か山かに見る。日は西の山に入つて平野には暮色が蔽ひかゝつた。

宿に歸つて、寺の廣場を眺め下す讀書室でこの手紙をかき始め、食後その室で之を終る。丁度十時半の鐘が塔の上からひゞいて、窓をのぞくと、寺の入口のかすかな燈明が暗がりの中に淋しく見える。今も尚堂の内には、聖者の棺の前に同じ燈明がかゝつてをるであらう。

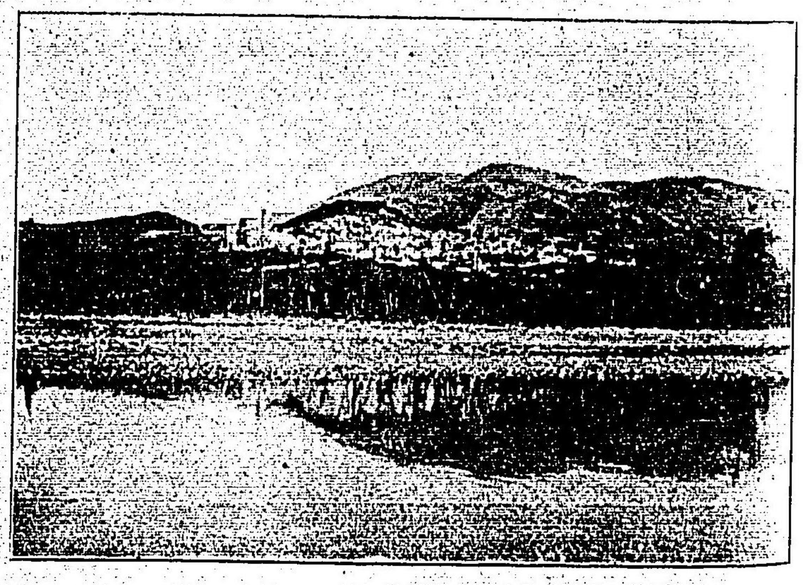
夜はふけぬ、聖者の前に光りある
不斷の法燈、てらせ世の暗。

アッシジの眺め

（山頂より聖フランシス寺を見る）

（一九〇頁參照）

（平野より見上げて）



（一七〇頁參照）

四月廿五日。　壁畫、棺前、新門の發心、古跡、古城。

寺の鐘の音に眼がさめ、顏を洗ひ着物を着る間に又鐘が鳴り出す。その音樂と共に朝飯のパンを食べる。部屋には何等の飾りもなく、電氣燈などもなく、昨夜は蠟燭のあかりをふき消して寢入つたが、鐘の音の起き居、殆ど僧院に居るに異ならぬ。

朝飯後直にフランシスの棺前に行つてその地下の燈明の前に默想し、それから畫を見る。この寺は三重になつて、その中段は棺前の拜壇になるが、上層にはジオットーが畫いたフランシス一代記の壁畫がある。そこの畫は中段のよりも破損がひどくて、古の面影を微かに忍ぶばかり。處々手入れをした筆は却つて畫を損じて了つた。

然しそれにかゝはらず、ジオットーが澤山の人物を配合し、又色々の光景を列べて畫いて、立派に全體に整つた作を作り上げたのは、その技倆と信仰との結果で、法然上人繪傳を大きくした樣な二十八幅が堂

の兩壁に列んだ様は美事である。一々細くは見なかつたが、フヰレンツェの十字の寺にも描いてある光景の分はどうしてもあちらのに劣る事が明かに見える。その他の分の中には流石はジオットーと思へるものもある。

特に目につくのは堂の端になつて、右にフランシスが小鳥に説教してをる景と、左には渇したものに岩の間から泉を與へてをる景。鳥の説法は春の空一面に碧く、茂つた木立の下に集まつた小鳥の前に、老體の聖者が説法をしてをる。之に對して岩間の泉は、岩ばかりの山の崖にフランシスが跪いて祈つてをる。その下に泉が出、一人の百姓がからだを横にして、如何にも渇したらしく谷の水に口をつけてをる。二幅が相對して面白い對照。

小鳥に説教の話しは傳記フヰオレッテの十六章にある話しで、一日フランシスが二人の弟子をつれて野路を行つた時に、小鳥が澤山をる

のを見て、それに説教し始めた。小鳥は集まつて來て、靜にその説教をきいたといふ。その説教も面白い。

兄弟の小鳥等、お前達は神さまの御恩を澤山うけてをる。それ故いつでもどこでも神さまを讃嘆するがよいぞ。神さまはどこでも飛んで行ける様にお前達に自由を賜はり、又二重にも三重にも着物を下さつた。……お前達は種もまかず耕しもしないに、神様はお前達を養ひ、又水の飲める様に川の流れや泉をくださつた。お前達が棲み隱れの出來る様に山や谷、巢をつくる様に高い木、皆神さまの賜であるぞ。お前達は紡ぎも縫ひもしないに、神様はお前達や子供等に着せてくださる。神様がどれだけお前達を可愛がつてくださるか、此で分からう。それ故、小な兄弟達、お前達はこの御恩を忘れぬ様にして、常に勉めて神様を讃嘆しなければならぬぞ。

この說敎は獨り鳥ばかりでなく、人間も謹んできくべきものである。佛敎で「冥加を喜ぶ」といふのが即ちこの敎で、神の讃美即ち念佛なり坐禪である。今の學校の敎育には「冥加」といふ考へが少しもないから、人情が殺伐に「冥加知らず」の不平家や煩悶家が澤山出來る。子供等の敎育にもこの點は餘程氣をつける必要がある。神德の讃嘆や四德の報恩は皆「冥加を知る」事一つになる。而して冥加を知るには、先づ天然を愛しなければならぬ。草花一つ踏むでも憐れに思ふ心情、犬の子一つ見ても此もいつかは佛と覩ずる情。又は御飯つぶ一つも菩薩樣として尊んで、その米粒に命をつなぐ有り難さを思ふ情。此の樣に何事にも何物にも冥加を知る心があれば、人情にも天然にも美はしさを見て、至る所に光明を見得る。フランシスが小鳥に對しての此の說敎は實によくこの敎訓を示してをるのみならず、又鳥に對しても獰に對しても慈悲を垂れたフランシスの人物がよくその中に現はれてをる。それを書いたジオットーの筆も、住吉か土佐派の古畫に似て、誠に奥ゆかしく又あどけなく出來てをる。

上段の畫をざつと見て、今度は中層から地下の下段におりる。此處はフランシスの棺を中央にして小御堂。棺の前には色々の飾りをして蠟燭が澤山上げてある。その前に跪いて祈念の人も居る。然しこの金色燦爛の飾よりも、中段の暗がりから一穗の燈明に、聖者の遺骸が此處に納まつてあると思ふ方が、感は遙に深い。その棺前に禮して中段に歸り、尙少し畫を見て、今度は町を東の方に見物に行つた。昔は富豪貴族の家であつた建物も、多くは貧民の住家になつて、壁ははげ、屋根は傾いて、昔の入口のアーチも石でふさいで物置になつたのもある。然し石垣の築き上げた庭、家の頂上に石の柱の緣側が殘つて、昔の御殿の物見臺の跡を傳へる。下には窓が僅で、上の方に見はらしのあるなど、何となう印度の富豪の家に似て、その上そ

こらを行く人の顔も色が黒く、着てをる着物の赤や綠の派手な色も印度に似てをる。その町の一つに石段を上つた家の入口に鸚鵡が三疋鳴いて居たので、愈印度を思ひ出した。

町は段々上つて市場に出る。そのぐるりには寺もあり、古のロマの殿堂を寺に變へたのもある。そこから先、尚東には一つの城門。その門を通して尚先に城門が見え、その間を往來する婦人の赤綠の飾りと城門や家々のはげた様な色との配合が非常に面白い。その上此の邊の家や城門はジオットーの畵そのまゝで、近世の西洋の建築を見て、ジオットーの畵が實らしくないと思つた誤も一時に去る。ジオットーは此ういふ家や城壁を見たまゝに畵いたのである。この二つの城門の間に聖キアラ(Santa Chiara)の寺がある。フランシスカン派の最初の尼、聖クララの寺で、その遺骸を葬つてある。寺には這入らずに先に行く路に、第二の城門を通してその先に第三の城門が見

える。地圖と合はすと、此が即ち新門(Porta Nuova)で、フランシスが若い時に此の門の外に出、四方を眺めつゝ一念發起し始めた處である。この聖者の一生にとつて最も大切の關係のある處に近づいたのを喜んで、第二の門も出、新門に近づく。門のアーチの中に先の方の山が畵幅の如く納まつて見える。近く麓の出たのがスバシオ(Subasio)の山で、その先に碧い色の中に白雪を殘してをるのがセレットー(Serete)の山。病餘の身の杖に憑つて城門を出かけた時、フランシスが此の景色を眺めて何と思つたか。

その前の歷史を云はぬと分からぬが、このアッシシの町と昨日見て來たペルジアの町と戰爭をした時、フランシスは年が廿歳であつたが、その戰に加はつて敗北して、ペルジアの山の下、聖ジョヴンニの橋で(昨日汽車で始めてアッシシの町の見え始めた邊捕虜になつて、一年の間ペルジアで牢に這入つて居た。一年の後にアッシシとペルジア

と和睦して捕虜はアッシシに歸された。フランシスはその後病氣で一冬は全く病床にくらしたが、春と共に少しづゝよくなつて、少しは散歩し得る樣になつた。そこで一日杖をついて野外の風光を眺めに出たのがこの新門。時は千二百四年で即ち日本では法然上人流罪の前三年。時候は丁度今頃の樣な春であつたであらう。十六七の頃から當時の貴公子の風として、町の若者と一緒に遊んでまわり、酒を飲んでは唄を歌ひ、色々の旗を立て笛や太鼓で町を練りあるいた。その若者が一年の間、敵の牢屋に捕はれたゞけでも、餘程心が入れかはる。通常の人間ならばその間にもふさぎ込むで、徒に心を苦めるであらうが、フランシスはこの間にも少しも困まつた風はなく、自分は將來世界中に尊ばれる人間になるといつて、牢屋の番人も驚く程快濶であつたといふ。「世界中に尊ばれる」といつたのも、その時には固より世俗の意味で、富豪貴族としての名譽權勢を夢みて居た

聖フランシスの小鳥說法（ジオットー筆）

（一七八頁參照）

のであらう。その血氣の青年が、捕虜の運命を逃れて、うれしや家に歸ると病氣。その病氣の直りがけに長い冬を病床ですごした後、一日春の日光にあたつて此の門を出た。心に非常な變化を來たすべき原因は色々集まつて居たのである。その變化を一念發起の方に向けたフランシスはやはり已に聖者であつた。

フランシスの跡をたどつて新門を出る。壁一つで全くの別世界、壁と石垣との町は夢の如く消えて、此處は全く天然の綠の世界。山は高く木は茂り、草原には一面の花。見上げる城壁の裾に流れる小川の瀧、路傍に湧く清水。特にフランシスの頃には、町は今の樣に貧民窟でなく、壁に畫のある家の並んだ町、貴族富豪の富に榮えた町であつて、その反對に山は木の茂みが多く、野には家や村は少なく、一面の綠であつたであらう。その場に立つてフランシスの精神が殆ど天然の默示の如くに、今までの樣なうか〳〵した生活が夢の如くに

なつたに違ひない。

城を出で人をはなれてこゝにひとり、
自然のうちに神を見にけん。

世をてらす法の光りの始めをば
こゝに見そめし我が聖の跡。

草原にねて古を忍びながら城門を見てをると、頭に赤や茶の巾をかけた女が、大きなざるをいたゞいて、高聲に話しながら來る。その後から白い牛に車をひかせて酒を運ぶ。褐衣のフランシスカン比丘がつゞいてくる。一種の畵である。特に女の頭に物をのせたり、白い牛の車など一層印度の樣で、崖に草刈る男の歌も印度のに似てをる。從つてフランシスを思ふと共に佛陀の四門遊觀を思ふ。カピラ城の町もやはり封建割據の古、このアッシと同じ樣に城壁で圍んで、中には人家が群集して、外は雪山の麓の天然を見はらしたに違

ひない。同じ樣な精神が同じ樣に城門を出て發心の端緒を開いたのも、決して偶然でない。四門遊觀の話しの樣に、四方の城門で老病死等を一つ〳〵見て感が起つたかどうかは疑問であらうが、城門を出て城內の生活を顧みて、それを棄てたいとの心の起り始めたとは、極めて自然の事である。

城門の遊觀に心さめ、　人をさませし救世の人、
アッシの聖、我がほとけ、　ひがしも西もあと一つ。

城門を出入りの人も時々あるが、その中に「今日は再び來らず」(Oggi non si rimette) と書いてある。二聖の事を考へてをる時に、車引きにこの格言を敎へられるのは妙な奇遇である。人はいつも「今日は再び來らず」と考へて、一つ〳〵の行にも一生に一度の今日と思へば、うつかりは出來ないが、この簡單な事が中々出來ない。その中に又

町の方から女の子が泉の水を汲みに來た。

ほとばしる泉汲む子よ、法の水
むかしかはらぬ味知るや否。

此は人々が各自分に問ふべき問題である。

城門から歸ると中食。三四日間廢した中食がまた始まつた。食卓は又イギリス人で、フランシスの事や書の事の話しが面白い。食事はよい加減にして、ルガノ以來始めて會話らしい話しをして面白かつた。

食後にはサバチエ氏が、宿の屋根の上につれて上つて、眺の中に這入る場所でフランシスに關係のある所を一々敎へてくれた。先づ東の方の山でスバシオの峰は古はもつと茂つて居た。フランシスの頃にアッシシに這入る大路はあの野の中の道で、それに直角に交はつた道のこちらに順禮の宿泊所があつた。あの二本のシプレスの

木のある處が、フランシスの始めて小鳥に說敎した處で、それからは始終小鳥に說敎した。傳記に出てをる小鳥の說敎はあの山に見える村と村との間、西の方の丘の上ペルジアの町の下に見える大きな家が、古の癩病患者收容所で、フランシスが泊つた處。それより遙西にかすかに靑く見える山がアルヴェルヌ (Alverne) の山で、フランシスがキリストの示現を受けた處。色々その場を見つゝフランシスの話しをきく。特に一生をフランシスの研究に委ねて、殆ど此のアッシシの住人になつてをるサバチエ氏からそれをきいて、身は七百年の昔に生き歸つた樣な心地がした。傳敎大師や法然上人、惠心僧都や慈鎭和尙など、一々此の樣に研究する人が出來なければならぬ。日本の佛敎の信仰はその中から湧き出やう。現にサバチエ氏はフランシスの後を追ふて、アッシシやその近傍に色々の慈善事業をおこし、今のフランシスカンの比丘も及ばぬ勢力を作つてをる。

それから町のあちらこちらを見て廻つた。古の宮殿や寺の跡、順禮の宿など見て、山を上つて城堡の一番上に上つた。山の頂、青草の原の上に石で築きあげた壁や塔が天をつく。此の町全體も城壁で圍んであるが、特に山の頂に牙城を作つたのが此の城堡で、土地の人は大岩 (Rocca Maggiore) と呼んでをる。城門のおとし橋や、櫓や、どこの城でも同じものを見、それから開い廊下を百間も過ぎて先には又塔。その頂からの眺めは實にはれやかで、昨日の墓場からの眺めを一層廣大にし、その上四方を一時に見はらす。その景色の大きさを一々述べても仕樣がない。石門に生えてをる黃色の花の名を問ふと、壁のすみれ (violetta di muro) だといふ。その名に背かずどこにも石壁には咲いてをる、前にボルドウで寺の壁に見たのも此れであつた。それ等の花を摘んで塔を下り、今度は山の草原にねて、又同じ景色を眺める。風は強いが、草原にねると、日の光りが溫かで、風にゆら

れる草花が敷物の樣にひろがつた先は城壁、その上に遠の山々。見上げる景色も面白く、下の野には、先に敎へられた、二本杉や、僧院から向ふの山々、その村々など一目にあつまり、その間にフランシスの寺が著しい。此の城壁にもフランシスは上つた事があらう、この花もその頃の花の子孫ではないか。又いつもの樣に花を摘んで下りた。

夕飯の後にイギリス人の間には入つて、又大に綸の話しが出て、それから此の手紙をかき終つた。此れから湯に入つてねる、今晚も窓から見ると、寺のあかりがかすかに暗の中に照る。

四月二十六日。 天使の聖母寺、說法の辻、日曜の勤行。

今日は下の方の寺に順禮が來るといふので、朝飯後その方に行つた。下の方の寺といふは「天使の聖母」(Santa Maria degli Angeli) といふ寺で、町から半里餘の野中にある。フランシスは新門で發心の端緒

を、得てから、色々の苦勞をして、父親から勘當を受けても屈せずに、信心の喜捨をあつめて寺々の修覆にかゝつた。この聖母の寺の修覆を終つた後、こゝで祈念の時に、身を捨て一錢も貯へずに世界に法を說いて廻はれといふ命をキリストから受けたのは、發心から五年目で、此がフランシスが獨りの修行から轉じて世を敎化する元である。その跡に大きな寺が建つて、今は野中に屹立して、此の宿から直下に見える。

城門を出て山道を下り、野中の大路を行く。今日の日曜には順禮の來るので、町のものがぞろ〳〵見物に出かける。粗末ながらには れ着を着て、男は紅や樺の襟かざりを派手やかに、女の頭かけも絹に色々の縫などあるのを着て、戲れながら行く。道を行く間には、後の山の上の寺々にも、行く手の聖母の寺にも鐘がひゝいて、春の野に何となく氣がはれ〴〵する。寺の近くに來ると、群集も多くなり、その

中に赤や靑の旗の樣なものゝ行列が見える。そばに行つて見ると、此が即ち順禮の行列で、色の赤やけた百姓が、白の法衣をきて、その下から象の脚の樣なヅボンを出し、而して手には蠟燭や、杖や、又は旗の樣に見えた十字架を持つて、列を整へて堂に這入つて行く處。堂の中には此等の順禮の歌もきこえるが、堂のぐるりの廣場は一面に賣物店、呉服類、食物、風船玉、あらゆる店が並んで、村のものが順禮を見たり店を見たり、ぶら〳〵してをる。又一方には木の下に高い臺をおいて、一人の男がその上に立ち、マンダリンといつて琵琶に似た樣な樂器をもつて、何か物語りを語つてをる。その語り工合は印度のラーマーヤナ語りや日本の平家に似てをるのと、勢込んで聲をはりあげるのとが違ふだけ、先づイタリアの薩摩琵琶といつてよからう。堂の中に這入つて見ると、此處も群集混雜は外と同じ事で、立つてうろついてをるもの、跪いて禮拜してを

るもの、懺悔室に懺悔をしてをるもの、それに男の順禮の一行列と女の一行列と、拜堂の役僧とを加へて、有り難參りや遊散がちやんぽんに入り亂れてをる。

堂は隨分廣大なルチサンスの御殿作りで、眞白の壁の處々に色々の畫などがある。全で山の上のフランシス寺の莊嚴深邃と違ふ。この堂の眞中に小な小屋の樣な堂がある、此が即ちフランシスの大發願の源になつた元來の聖母堂で、そこらの辻にある辻堂に同じく奥行きも五六間にすぎない。フランシスは一生時々此處に來て祈禱をして、その死ぬ時も態々病軀を此の堂の側に移させて、その命を終つた。その臨終は、千二百二十六年の十月三日、日は西の山に落ちて、星の光りがこのオンブリアの野に輝き始めた頃。山の上の寺々からは七時か八時(この土地の云ひ方では一時か二時)の鐘が野を亘つた時であつた。二十七の年にこの堂で大發願をしてから四十四

で死ぬまで、此の聖者が常に來ては祈念をした貴い故跡である。フランシスの頃にはこの野邊には木立が茂つてをつたといふから、この小な辻堂も林の中の靜かな處であつたであらう。せめてはこの堂を元の野中において、その傍にシプレスの木立でも殘して聖者の昔を偲ぶ樣にすべきに、フランシスの死後三百餘年たつて、今の大きな堂を建て始め、元のゆかしい紀念をその屋根の下に閉ぢこめてしまつた。フランシスが入滅した時天に輝いた星も、再びこの堂の屋根を照らす事が出來ない樣になつた。屋根にも塵、壁の石にも塵。順禮等はこの堂に這入つてそれから大堂の中を練る。聖者自身の淨い精神はこんな大げさで無趣味の大堂や、こういふ儀式で亂される。堂の中の群集に暑くもあり、又こう考へると悲しい樣な氣がして、急いで堂を外に出た。外からは順禮の一隊がピーピードン〳〵の樂隊でやつて來た。店の賣聲や何かと一緒に騷がしいばかり。

こういふ光景を見て、キリストがエルサレムの殿堂に行つて、殿前の物賣を叱りつけた昔を偲ぶ。キリストは氣が荒らかつたとか性急であつたとかいふ人があるが、此の様な聖者の靈跡に此の様な光景を見れば、キリストの行ひに同情を表して、如何にも最もであつたと思へる。

この寺を去つて元の道を少々歸り、それから野中の路に這入つてアッシシに向ふ。山の上の家々、その西の山端のフランシス寺が、目の先に一面の畫幅の如くにひろがる。野中に見える白壁の家が、昔の癩病院だと敎へられたが、フランシスが病軀を天使の聖母堂に移す時、その前に來て、暫く輿をとめさせて、アッシシの町を見返へり、手を擧げて生まれた地に最後の別れをしたといふ處。今見るアッシシの眺めは多少その時とは違つても、此が聖者の一生の中に故郷に歸る度に度々眺めた同じ山、同じ町と思ふと、單に他郷はと思へない。

それから野中を東に行つて、サバチエ氏に敎へられた二本シプレスの處に來た。昔の本街道といつても今は石高の荒道である。それと他の道が交叉した處が少し高地になつて、あたりに木立が少しある。その草原にすわり込んで考に沈むと、あたりは靜かに、人も來ず、只小鳥の歌ふ様な聲のみきこえる。

その昔し、ひじりにきゝし法(のり)の聲
くりもかへしてなく小鳥かな。

フランシスが小鳥等に說敎して神の惠みを說いたのを考へる。

つむがねど羽(はね)のころものみ惠を
父にたゝへて小鳥等の鳴く。

小鳥等も耳かたむけし御敎は
法性自爾のたへの法かも。

そこで花を摘んで、昔の道を町に向つて上る。フランシスが幾度

此の道をあるいたか。

百千たび聖(ひじり)のすぎし足の跡、
目には見えねど我れ尋ね見ん。

道ばたに飼ひ放しの馬が草を食つて居る。
あはれ駒、背にのせて行け、今にだも
足に血しほのひじり來まさば。

フランシスはキリストの跡を偲んで、手足に十字架の傷が現はれ、血が出たといふ。その足でこの石道をはだしであるいたかと思へば、指の間に魚の目ができて困る位は何でもない。

山を大分上つて城門に近づき、それを見上げては、懐古の情が一層おこる。

ふるさとに歸る城の戸見上げては、
まこと故郷の父をこひけん。

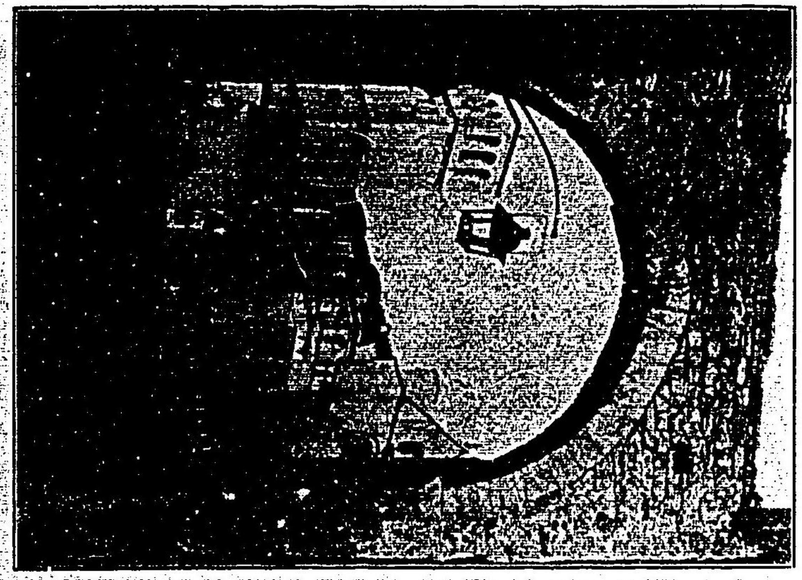
この城戸から町に這入つて宿に歸ると、遠の山々が曇つて少し雨が來た。

中食後暫く休んで、フランシスの寺に行つて壁畵を見る。今日はあかりが薄くてよく見えぬが、時々照る日光にはつきり見える。畵のみならず、大きなアーチの聯合、そのアーチと天井と壁とに畵をかき分けたジオットーの技倆は見るに從つて感心する。四時になつて夕の勤行が始まり、經文の誦讀の聲がヴォールトにひゞき亘る。この聲をきいては畵を見、畵を見ながら又經をきく。

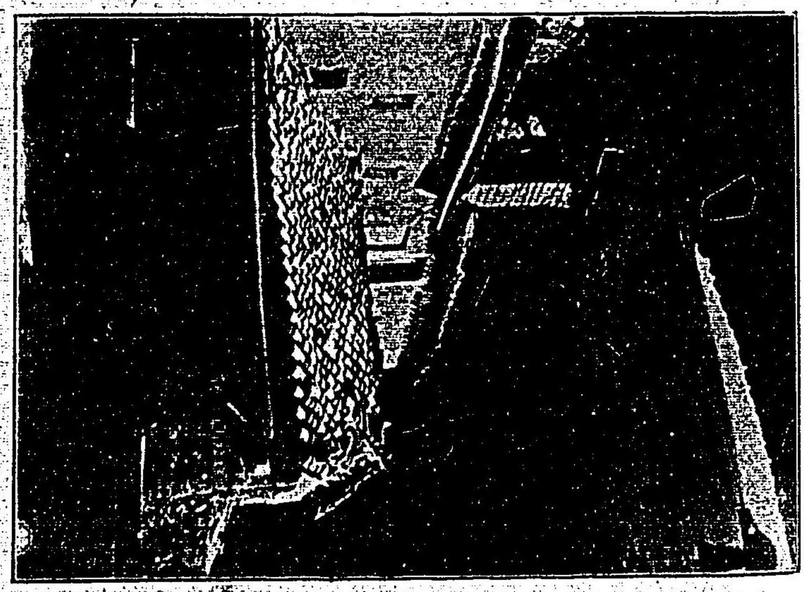
五時になつて塔の上の鐘が大小律呂を合はせて鳴り出す。その中に役僧が聖體(祭りの本尊)を安置し、香爐や蠟燭を持つた子供等が幷ぶ。オルガンとセロとで本式の勤行が始まり、コーラスは四人の聲で、此は町から來たものが歌ふ。香の烟がアーチに滿ち、音樂は天井から天井にひゞき亘り、燈明の火にてらされて、眞中の天井にある

壁畫の「天上の聖フランシス」が神々しく見える。この堂で音樂(而かも四聲合奏の立派な)をきかうとは思はなかつた。建築も畫も音樂も揃つて、その上、それが聖者の棺の上の勤行で、特に興が深い。今日はよい日曜を送つた。宿に歸つた頃には、日は西に傾き、下の天使の寺は野中に屹立し、二本シプレスは黑くしよんぼりと見える。

食事後は又イギリスの人等と畫の話し。その中にフランシスの傳をかいたお婆さんのミス、ストダード (Miss Stoddart) といふ人に紹介されて、法然上人の事を少し話したが、日本にも誰れかフランシスに似た人があらうと思つて居たが、一寸書物などで見ても分からなかつたと大喜び。法然上人繪傳の寫しを見せ、又それから畫の話しに歸つて、ラファエル以後の墮落の原因や、ジオットーの畫いたフランシスの顏が必しも肖像でないが、當時の人心に映じた跡である事や、面白く有益な話しで、互に別をつけて、各部屋に歸つた。イギリス人に



城門を通して聖フランシスの寺　(一七二頁參照)



カルツェリの庵室　(二〇七頁參照)

は實に話しの合ふ人が多い。

四月廿七日。 カルツェリの庵棲、グビオの狼

今日はきのふに比べて一層の好天氣。朝から日光がまばゆい位に照つて、この山の上にも春はたけたと思へる。朝からフランシスの隱遁の場所であつたカルツェリに向つて出た。町を東に上つて、堂母の後の廣場に出る。此處はフランシスが町の小兒等に「氣狂よ氣狂よ」といはれ、亂暴にあつてもそれを忍んだ場所である。そこから行く手、段々上り路の先に城門があつて、住み荒れた家の屋根の上にスパシオの山が聳え、峰に殘つた雪が半月を浮べた形に白い。上りつめて城門を出ると、こゝは新門の外と遠つて、如何にも山の中のやうな感があり、山の岨に一面のオリヴ畑、山には一面の青草。眺めは先のスパシオの峰を見上げるばかり。山路を段々に上つて、眺めは

オリヴ畑の上から下の平野を見晴らす。上るに従つて草の綠も少くなり、オリヴの畑はなくなつて、山一面に灰色の石原。道ばたの岩に腰をかけてゆつくり休みながら眺めを貪る。黒すんだオリヴの畑が麓に延びて、その盡きる先は平野の麥畑。その崩ゆる綠の處々に雲の影が黒のまだらを作つて、綠の海に薄黒の浮島を浮べたやうに見える。あたりには木立もなければ、鳥の聲もせず、背後の山の岨に岩をつたふて群がる羊の鈴や、そのめい〳〵と鳴く聲が時々きこゆる。休んでは上り、上つては休む。路は段々石高になり、灰色の岩にあたる日光がまばゆく、比叡山の雲母坂を上る樣な氣がする。

故郷の日枝の御山ぞ忍ばるゝ、
ひじりの跡をたどる山路に。

雲母坂と同じやうに道が處々分かれてゐて、どれかと迷ふ。先に十字架のある方をたどつて行く。

これやかれ迷ふ心の道しるべ、
行く手のさきに十字架の立つ。

山の鼻一つまがつて谷の奥、山の間に木立が茂つて、聖者の跡を傳へるカルツェリ(Carceri)即ち牢屋精舍の寺域と見える。谷に沿ふて路の盡きる處に庵室の入口が穴の如き處にある。戸をたゝくと、中から木の履の音をかちり〳〵とさせ、僧が戸をあけて迎へ入れてくれた。家の中から出て來た他の老僧が笑顔で案内してくれる。先づ第一は古の僧院の一部を堂に作つた一室。その正面の聖母はフランシスの時からのだといふ。その上にある僧房は、一方は岩石の崖を壁にしたもので、小さな僧房の窓からは谷を見下ろす。小な狐の穴の樣な戸口をくゞつて下におりる。三疊に足らぬ全くの岩窟、その岩の床の少しくぼんだ所に、木の枕がある。即ちフランシスが此處に來ては寢た處だといふ。「山にいね岩を枕に」といふのは日本の

山伏修行できく事であるが、フランシスはそれを修行とも苦行とも思はず、あたり前の事として行つたのである。その岩屋に寢起きをして水とパンとの外に飮食もなく、ひたすら神に祈念したフランシスは、吉水の禪房に世を離れて唱名念佛に餘念のなかつた法然上人とよく似てをる。近世の人は山中の隱遁といへば、直に嘲つて、小乘の修行だとか、弱虫の泣き根性だとかいふが、それはこういふ隱遁の聖者の心根を知らないものである。

法然上人は小乘の修行、聖道の難行に弱つて淨土を欣求したのでなく、聖道自力の修行の中に他力本願の有り難みを知り、小乘のやうな禪房隱棲の念佛三昧の中に、衆生濟度の力を得られたのである。それと同じくフランシスも、この谷間の岩屋に引きこんでは神に祈りその念神三昧の中に得た勇猛心を貯へて、世間に出て衆生の救ひに從事したのである。この谷間の水に洗はれた淨い心を持つて、世

に出ては癩病者の傷を拂ふてやり、この岩窟の中に神から受けた示現に基いて、キリストの行ひを世の人にも勸めて廻つた。その勇猛奮闘の一生の力は實にこの石の床、木の枕に眠る間に養はれたものである。

岩の床にたえぬ祈りぞ、神の名を
世に師子吼する力なりける。

その岩窟の上の岩室には、フランシスが始終身を離さなかつた十字架が安置してある。木彫りのキリストの像は剝げた樣にあはれに見えるが、此が即ちこの聖者の念々歸敬の本尊であつたと思へばその姿は、黃金珠玉の像も爲めに光りを失ふ。十字架の室を穴をくぐつて出ると、谷の涯にのぞんで深い底を見下ろす。今の僧は之を惡魔の淵と名けてをる。聖者も念々常に惡魔の淵に落ちない樣に十字架に祈つたであらう。

世の中に目にこそ見えね、底深き
　悪魔のふちぞ充ち満ちにけり。
ひじりさへ悪魔のふちを目のあたり
　谷のかげにもいましめにけり。

そこから一つ橋をこえて木立の茂つた山岨の道に出る。老僧は、この先きの門をあけて園に出る様にと教へて、別れて行つた。獨りで木の蔭をたどり、門一つあけると、此も同じ山の岨ながら草青々とした園の道。兩側にシプレスの木立の並んだ奥には聖母堂があり、草原にはマルゲリテの白紅の花、岩蔭にはすみれの香り、僧院の岩屋とは又別の世界を作つてをる。聖母堂に行つて、日あたりのよい草の上にねて、谷間の靜けさに日光に浴びる。花は枕元に咲き亂れて、その間に飛ぶ小な蟲が花に戯れる。

岩にいねしひじりの床にくらべては、

草のしとねは錦なりけり。

木立の間には鶯の様な鳥の歌ふ聲が常にきこえ、その間に時々閑古鳥の聲、向ひの山の羊の鈴。寂靜のこの谷に祈念三昧の場所を撰んだ人の心を忍ぶ。

世をはなれ心すみゆく谷の間に、
　禮讃同向、もろ鳥のなく。

長い間この草の上にねてから、元の僧院に歸り、尚一度聖者の岩の床に敬禮をして中庭に出る。その眞中に井戸がある、それはフランシスの力で奇蹟に湧いたと云ひ傳へる井戸。フランシス以來幾多の修道僧がこの井戸の水にパンを味つて、その祈念三昧の日を送つたか。その水を飲み、摘んだ花に水をかけ、

その上ゆ絶えせぬ泉汲みあげて、
　甘露のあぢに喉うるほしつ。

僧に禮をして院を出で、尚一度その門を顧みた。スパシオの山が二つに割れた様になつた、この谷間、世間を離れて全くの山奥。土地は高くても四方の眺めは山のみのこゝに、この岩窟の精舎を營んで修行した聖者の心根は、印度の岩窟に自淨其意の佛勅を實行しやうとした比丘の心である。僧院の屋根に出るかすかな烟は、僧が貧しい糧を煮る烟であらう。石垣の下に犁鍬の音は野菜畑に神の恵みを得る僧の仕事であらう。今の佛教もキリスト教も精舎生活の貴さを忘れ始めたのが、その墮落の大原因でないか。實踐の修行で始めて色讀信仰の力は出よう。今の僧はどうであるにしても、自分等の如き精舎生活の門外漢は、尚古の聖者達の眞の心根の萬分一にも達しないであらう。

谷に沿ふた路を元に下る。僧院の屋根は早くに見えずになり、谷間の木立もかくれる。山角を一つ廻はつて、路は廣く平野を見下す

カルツェリの山道

（二〇九頁參照）

ダミアノの庵室

（二一一頁參照）

高い崖に出、そこからアッシシの城廓、寺塔、家々が脚下に手に取る如く見える。フランシスがあのカルツェリの谷間に退いて祈念を凝らした後、町に説教に出やうとする時、この山角にきて、あの町の壁や家を眺めて、何の感があつたか。

谷間を出てゝ山の上、一むら家の人の世を見てし聖者の眼には、救世の光の輝きにけん。

段々下りると、又元のオリヴの畑、花の草原。城門を這入つて、昔フランシスの亂暴に會つた廣場には人の影もなく、堂母の塔から六時(即ち正午の十二時)と十五分を打つた。堂母の前のフランシスの銅像は日が照つて白く光つた敗石の間に一人無言で立つてをる。

宿に歸ると人々は食事。カルツェリの僧院から取つて來た花を分けて、一つは自分の机の上、一つはミス、ストッダードに送つた。机を同じうする人等もカルツェリの花ときいて、手に取つて一々嗅ふ。ミス、

ストッダードは、干ぼしにして殘すといつて喜んでくれた。此等のイギリス人は皆フランシスを敬愛して、カルツェリの花をかく大切にしてくれる。國は東西に距つても、同情は人と人とを心から結びつける。

午後は休んで宿の讀書室ですごした。フランシスの寺や、下の平野を眺めては本を讀む。その中にフランシスが狼に說敎してそれを馴らしたのは話しでなくて、事實であつたこと を書いたのがあつた。このアッシシから十里ばかり北にグビオ(Gubbio)といふ町がある が、その城外に狼が出て人が多く殺される。それをフランシス、が憐んで、狼の處に行つて說敎をした處が、狼はフランシス、なついて、終におとなしい犬の樣になり、町のものはそれを穴倉に飼つておいたといふ。此の話は古い傳記にあるが、グビオにその狼の墓と傳へるものがあつて、その頃に彫りつけた碑文が殘つてをつた。話しの樣

な話しであると思つて居たが、此頃その邊りを掘つて、狼の髑髏を發見したといふ。その狼の活きてゐた時から飼つて、死んでその墓を作つた。その證據が碑文と骨とで出て來たとすれば、その話が事實で、狼は犬の樣に飼はれて居たに違ひない。

夕食の机で色々の話しから、菩提回向の話しをしたら、イギリス人の婦人等は、その樣な高尙な考が日本に古からある事を知らなかつたといつて、特にその中でロマ敎會に屬する婦人達は大に得意がつた。

四月二十八日。

聖者の生家、聖者の石像、神の鳥、ダミアノの庵室、太陽の頌、聖クララ、女子敎育。

一天はれ亘つて空は眞青の深綠。フランシス寺の塔や壁が日光に白く照り、碧空に鮮かな輪廓を畫いて、ジオットの畫そのまゝ。堂の

中は外の日光にくらべて暗がりの中に燈明がかすかに、晨朝の勤行の聲がきこえる。拜壇の前に跪き、瞑目祈念して眼をひらけば、天井の壁畫が神々しく、その中にフランシスの姿がはつきり現はれる。

堂を出で本通りを東に中央の廣場に出る。坂を上れば、に堂母の圓塔と鐘樓との間にスバシオの山が聳え、眞青の空に半月形の殘りの雪か一層白く見える。廣場の横路に這入つて、フランシスの生まれた家の跡に建てた寺に行く。寺は新しいが、此がその聖者の呱々の聲をあげた處。母親の親切には涙を流し、父親の譴責には屈せず、出家修行の決心をした家の跡。町の中央に近い富豪の家居、その富豪の財産も何も顧みず、却て「貧」を自分の理想に、キリストを主人として事へた人も一時はこゝを住家にしたのである。

又坂を上つて堂母に行く。その正面が古いビザンチンのゆかしい作りにひきかへて、中はバロッコの俗な作り。然しその中にデュ

レの刻んだフランシスの大理石像がある。堂の前にある銅像はこの石像の寫しで、瘠せた頰の肉には衆生濟度の熱心を現はし、傾いた首には信心服從の德を示す。等身の石像は活きたその人の姿を忍ばしめる。

フランシスが子供に狂人と呼ばれた處を尚一度すぎてスバシオの雪を見上げ、それから此頃皇太后の盡力で出來た公園に暫く四方を眺めて、下の新門を出た。このゆかしい跡の草原にねて、はれた空に一點の雲もない深い碧色の天を見ると、その中には光りのない寂光が滿ちてをる。その空をかける燕が高く上つては姿を碧空中に失ひ、飛んで來ては又眼の前をすぎる。ジオットーの畫にある碧空の天使も此れから來たかと思はれる。ダンテが天使を「神の鳥」と呼んだ事も思ひ出る。此等の燕はフランシスが此處で發心の端を開いた時にも飛んで居たであらう。

君が上を神の御使守りけん、

あを空およぐ燕にも似て。

そこから坂路をおりる。オリヴ畑の茂つた間に麥があをく、げしの花が處々に深紅に綠を破る。大分に下りて聖ダミアノ(San Damiano)の庵室に着く。戸をたゝいて僧に案内して貰つてその中を見た。

このダミアノ僧院はフランシスの一生には關係の深い處で、新門の發心の後には時々貧民の世話をしたり、癩病者の集まつた所に行く。或る日フランシスはこの堂に來て、十字架上のキリストを拜んでをる時、キリストが此の堂を修覆せよと命じたと聞いて、一人僧が留守をして居るだけで荒れはてたこの堂を修覆し、人にも助けを乞ひ、自分で山から石を切り出して修覆を終つた。それから後も始終この堂に來て祈念をしたが、父親の

命で絹を賣りに行つた時、絹も馬も賣つてしまつて、此の堂に歸つて來て、その金を番僧にやらうとしたが、番僧はフランシスの父親を恐れてそれをうけない。そこでフランシスはその金を窓の外にほり出して、この堂内に住み込んでしまつた。父親はそれをつかまへに來たが、その時は壁が不思議にフランシスを隱したといふ。その後、父親から勘當をうけて全く自由の身となつてから、他の寺の修覆をしたり、癩病者の世話をするに、暫くは此處に住んで、この堂の寺男の樣になつて居た。その後修道の仲間が殖えたので、フランシスは別の寺即ち天使の聖母の側に庵室を作つた。千二百十二年にクララ(Clara, Chiara)といふ貴族の娘が出家して弟子になつてから、フランスはこのダミアノの庵室を尼寺にして、クララやその外の尼を住まはせた。それから十數年經て、フランシスは病身になり、且つ眼も見えない樣になつたので、死期も近づいたのを覺悟し、旅に出る前にク

ララやその他の尼達に別れをするため、一度この庵室に來た。直に出發のつもりが、發熱のために延びて、終に二週間この庵室に泊つて、尼達に介抱をうけた。然し尼寺に男の僧は泊る事は出來ないから茅や竹で小屋を作つてそこで寢て居た。名高い「太陽の頌」(antica del sole)といふ讃美歌を作つたのはこの庵室の外の小屋であつた。その年の秋に、下の方の天使の寺で死んで、その死體をアッシシに歸す時に、フランシスは死體で尚一度此のダミアノに來て、尼達に永遠の別れをした。それ故この僧院はフランシスの一生にも、又その最初の女弟子のクララにとつても大切の關係のある處。

案内せられて先づ堂に這入る。小な堂の中に色々の本尊があつて、田舍めいた飾りはあるが、低い壁に丸天井の素質な堂。左にはクララの念持像や、その聖晩餐のパンだとか、色々遺物がおいてある。その中に鈴の樣な小な鐘があつて、それを打つてクララが尼達に勤

行の時間をしらせたといふ。たゝいて見ると小いながらに實に清い音がして、餘響が永くつゞく。

音すみてきよらにひゞく鐘の音は
ひじりクララが心なりけり。

右の壁には古の窓の跡がある。即ちフランシスが金を投げだした窓だといふ。

窓の外黄金を投げし心にて
つきぬ寶を世に殖ちけり。

その正面の拜壇をすぎて、堂の後の方は、僧等の集まる所になつてをる。フランシスの時にはそこに堂の拜壇があつて、彼れが堂塔修覆の告げをうけた十字架はそこに立てゝあつたといふ跡に穴がある。然し今はその十字架は市中のクララの寺にある。クララの死後この寺の尼達が市中に新しい寺を得て、それに移る時、十字架をも

一緒に持つて行つたのである。

本堂の横に小な堂がある。そこに元はクララの棺を納めてあつて、その棺から始終香氣が香つて、室全體に妙香が薫じたといふ。

なきからの香りし跡は年經ても、
殘んのかほり心にぞしむ。

その隣りの室は今は寺役の室にしてをるが、そこがフランシスの茅小屋のあつた處で、「いと高き主にほまれあれ」尊き我が兄、輝く日、神の姿のいと高き日」と、日月水火の讃美を歌つたのはこゝである。今の室は窓一つながら、その窓を通して碧空も見え、日の光も今日は特に暖くさしこむ。然しフランシスの茅小屋は云ふまでもなく汚いいぶせき小屋であつたに違ひない。そこへ鼠が始終來てあばれても、フランシスはそれを苦にせず、特に目が段々惡しくなつて殆ど盲目になつた後には、愈、神の光を讃美して、始終樂しい報恩謝德の心を抱

き、この「太陽の頌」を歌つた。その心根は尋常一樣の勇氣や信仰で出來る事でない。フランシスは肉眼は見えないでも、心の眼には神の光明、慈悲の光りが滿ちてゐたのである。その事を思ふと、法然上人の「月影のてらさぬくまはなけれども、ながむる人の心にぞすむ」の歌を思ひ出す。

目しひて、尙も日の德たゝへにし
そのこゝろこそ、日の光りなれ。

それから、クララの祈禱室、食堂、寢室、その他尼達の室で今は僧院の僧が住むでをる處など隅なく見て、一々古を偲ぶ。特にその僧寺の壁と壁との間の屋根の上が小な花園になつて居て、それがクララの花園であつたといふ。屋根の上に土を盛つて黃や紫の香る花を植ゑ、壁に沿ふて石の腰掛がある。案內の僧に案內を辭し、その腰掛にかけて、日あたりの光りに浴して靜坐する。僅かな壁の間、欄干の上

の草花を越してさきにシプレスが近く二三本青黒く聳え、緑の野、谷向ふの山が遠く見える。紺青色の空はあくまで深碧く、遠くになるに従つて稍かすんで、山の端に朗かな碧琉璃を浮べる。花の色々に山の色、シプレスの青に空の琉璃、世は光りばかりに充ちて、あたりには蟲の聲すらない。

香りみち光りしづけきこの園に
ひじりの尼の姿しのばる。

見てをる間に、時々小さな雲が山の端にあらはれ、日光に照らされて白くひかり、暫くして消え、又現はれる。

その上の清き姿を偲べとや、
まさ青のそらに光る白雲。

日のあたゝかさにぼんやりそこに坐つて時を經た。歸りがけに園の花を摘んで手帳に收め、

つむ花の香りを袖におさめてぞ、
クララひじりのかたみにぞせん。

尙一度、餘香の室、フランシスの小屋の跡に靜坐して後、庵室を出た。庵室の前の草原にね込んで、又日光に浴してあたりの景色に見とれる。オリヴの茂りの中に古びた壁の庵室。フランシスの古も眺めはこの樣にあつたであらう。左に高く見える山から石を切り出してこの堂を修復した、貴公子のあはれの姿がそこに見える樣に覺える。

この壁に年へし石の一つだに、
ゆかし、聖者の御手ふれし跡。

岡を上つて城門に向ふ。正午の日光が石道を照らして、砂も光る。茂つたオリウの下にけしの花の深紅が風にそよいでゐる。世は俄に夏になつた樣である。空の青さに石の白さ、木の葉の茂りに一輪

一輪淋しげのけし。こういふ著しいはつきりした深い對照がイタリアの畵や詩に表はれるのも偶然でない。日本の歌には春霞、イタリアの詩には碧空。日本の畵には櫻の雲、イタリアの畵にはシプレスの木立。「花の雲、鐘は上野か淺草か」と沈思した芭蕉はどうしても、日本の佛敎詩人。「常春の日にたゝへの香奉る久遠の薔薇」に聖母を見たダンテはイタリアのキリスト敎詩人。此の樣に兩方に特色はあつても、聖フランシスには法然上人の面影を見る事が出來る。

新門を入つて町を行くと、聖クララの寺に正午の鐘がひゞく。

碧空にひゞきも亘る鐘の音は、

クララが清きこゑとこそきけ。

午後はこの聖クララ(今のイタリア語ではキアラ)の寺に行つた。この寺もフランシスにもクララにも關係の深い地に建つて、今は寺と共に尼僧院がある。クララといふ婦人の聖者はこのアッシシに威

勢を振つた大名でファヂリノ(Favorino)伯といふ人の長女であつた。この大名はスバシオの山の一角に城を持つて居たが、冬はアッシシの屋敷に住まつた。今のクララ尼僧院の下の石垣はその屋敷の殘りだといふ。クララはこの伯の長女で名高い美人でもあり、妹が二人あるのみで、男兄弟はないから、伯爵の財産を讓らるべき身であつた。それに子供の時から慈善の心が深く、貧民の世話などしてあるいたが、十八の年に緣談が持ち上つて、父親の考へた婿はどうしてもクララの氣に合はぬ、當時普通の放蕩の貴公子であつた。そこにフランシスがアッシシの寺々で清貧の敎、キリストの愛を說いて人を感化するのを耳にし、一日その說敎をきいて、クララは同じ樣な出家修行をしたいといふ考を起した。クララの屋敷の直そばで、今のクララ寺のある處に、元は聖ジョルジョ(San Giorgio)といふ寺があつて、フランシスは始めてそこで說敎をしたのであるが、後にも屢、說敎をした。ク

ラがフランシスの説教に感化せられたのもその寺で、即今のクラ寺の地である。クララは出家の考を起し、母親にも話さず、只伯母にのみ相談して、フランシスに剃髪出家を頼んだ。丁度佛陀と同じ様にフランシスは始めは婦人を出家の團體に入れる事を躊躇もし、且つクララにその難行を諭したが、クララの決心は動かない。そこで遂に出家入道を許して、復活祭の夜を期して、山の下の天使の寺に來させる様に手筈を整へた。その日、即ち千二百十二年三月十八日(即ち法然上人の滅後三ヶ月ばかり)にクララは伯母と他に一人の婦人を伴つて、夜家を出、此間通つたマヨナの門を出、畑の間を過ぎて天使の寺に來た。そこで入道の式を行ひ、フランシス教團の最初の尼になつた。その後クララの妹のアグチス (Agnes) も伯母と共に尼になり、その他の同行も出來、フランシスは元自分の居たダミアノの庵を尼寺にして、クララをその長にした。クララの死んだ後に、ダミ

アノは城外にあつて危險の多いため、別に尼寺を作つたのがこのクラ寺で、クララの遺骸も、フランシスの發心の十字架もこの寺に移した。

堂の中は簡單で殆ど何もない。天井に畵はあるが、修繕の足場で見えない、地下にはクララの棺を安置した大理石の立派な堂がある。燈火をつけて見ればクララの遺骸が見える様になつてをるといふ事であるが、それよりも薄暗がりの堂内の方がよいから、燈火を辭はつて暫くその中に靜坐した。

それを出て本堂の横の戸をあけて貰ふと、そこに小な堂があつて裝飾も中々よくフランシスカンの聖者の繪が(ロレンツォなどの筆で)列んで、クララも妹のアグチスもその中にある。その堂から鈴をならすと、壁の窓を開いて中から尼さんが出て來て、元ダミアノにあつた十字架を見せてくれる。窓には鐵の柵があつて、思ふ様には見え

ないが、蠟燭のあかりに戸帳の中にある十字架を見上げると作は意外によい。ビザンテン風ではあるが、キリストの顔つきには活きた表情が見える。十二世紀の信仰に養はれ、その上、心に苦悶のあつたフランシスが野外の靜かな庵室の中で、此十字架のキリストに祈念し、その示現をうけたのも無理でない。野中の庵室によくこれだけの作が安置してあつたと思へる。然し畫として作のよしあしは別問題で、この畫がフランシスを導いたといふよりは、フランシスの心の中のキリストがこの畫にのり移つたのである。

君ならでたれかこの畫に言きかん、

こゝろに神の聲しなければ。

朝はダミアノ、午後はクララを見て、フランシスとクララとの大切な跡を一日に見た。外の寺に行くよりも今日は野原の見はらしでくらさうと思つて、岩の上の城堡に上り、その草原にねころんで、いつ

もの様にぼんやり四方を跳める。れた空の靜い空氣に、野も山もすき通つた様に見える。全くねて空のみを見ると、その青さの高い深みに無量の光りを見る。下の寺々の鐘が何か遠い下界の聲の様にきこえる。

和かな草原をあるいて山を下り、新しい細道を辿つて町を見下しつゝオリヴ畑に下りる。町に出た處に僧院があり、その向ひに貧民の女の子の學校といふ札の家がある。その前に立つて居ると、同宿のイギリス人でゴード(Mr. Goad)といふ人が來た。きいて見れば、此が即ちその人の盡力で出來た貧民學校で、女の子に讀み書きの教育と手仕事を習はせてをるといふ。それなら見せて貰はうといつて、二人が家の戸をたゝく。中から尼さんが來て、二階の仕事場につれて行つてくれた。その室には他の尼も居り、女の子が二十人ばかり色々の仕事をしてをる。皆はゴード氏の來たのを見てうれしさう

に立つて「今日は」と挨拶する。縫ひやレースや眞田の様な紐など、各仕事をしてをる。子供等は一見して殆どこのアッシシの子供と思へないほど清潔で、顔つきまで温和に高尚になつてをる。又それを世話してをる尼達も、如何にも自分の子供等を可愛がる様にして、その仕事を見せてくれた。ゴード氏も亦自分の子供や妹等の間に來た様に、子供等と話しをしてをる。それからその他の室や、食堂、臺所、庭の畑など見廻はつた。イタリアにもこんな清潔な所があるかと思ふ位で、子供等の食卓は大理石で出來、その上に皿やコップがうつくしく並べてある。寢泊りはせぬが、食物も着物も皆學校からしてやつて敎育するのであるから、子供等もきたない自分の家よりも學校の方を内の様に思つてをる。元の室に行つて子供等に別れを告げて、ゴード氏と一緒に學校を出た。そこへ又二人イギリス人の婦人が通りかゝつたので、ゴード氏はその人等を案内して學校に戻り、自分

は、フランシスの寺に向つた。ふり返ると夕日が學校の窓を照らして如何にも淨い幸福な生活の家と見える。

寺に行つて壁畫を見る。日光が丁度西の窓から照り込んで、ジオットーの十字架の畫を正面から照らしてをる。その背景の空の青さはまるで今日の碧空そのまゝで大空に飛ぶ天使の裾は雲の如くになつて、クララの園から見た雲に似てをる。十字架の下には、キリストの死を悲しむ聖母始め弟子たちを左にして、右にはフランシスがその弟子を率いて十字架を哭し、その右にはユダヤ人等が、天使の飛んで來たのを見て驚いてにげだしかけてをる。如何にも活動があり表情があつて而かも落ちついたジオットーの特色が十分に見える。尙堂内のあちらこちらに畫を見ては考へ、時を經て夕食の時間に宿に歸つた。

食後にはストッダートとゴードと三人で色々の話しが出、互に今日

の畫見て來た事や、學校の事、それから話しは法然上人に移つた。勅修御傳の畫の寫しを見せて、上人の一生や信仰の話しをしたが、二人は喜んできいてくれ、又上人とフランシスと相似てをる事も十分に賛成してくれた。そこへ今日ベルジアに遠足した三人の婦人が歸つて來て、おみやげの菓子で、六人がおそくまで愉快に話しをして、別れたのは十時半であつた。

今日は二ッ寺を見、學校に行き、晩は話しで實に愉快な日であつた。殆んど一ケ月近く日本語は話さぬが、英語で氣兼ねなく話せば殆ど故郷に歸つて自由に人に話しをする様な氣がする。此等のイギリス人と此處で逢つて話しをするのもフランシスの德、此等の人が耳を傾けて法然上人の事をきいてくれるのもフランシスのお蔭である。東洋と西洋と人情の根本が違ふなどいふのは人情を知らぬ人のいふ事で、ギリスト敎と佛敎と別のものゝ如く見るのは自分で狹

い垣根を作つてその中に立てこもるに同じと思ふ。

四月廿九日。 天使の寺、聖者の最期、刺なしの薔薇。

朝はきのふに引きかへて曇り。讀書して十一時からフランシス寺に行つた、中段はいかにも暗いから上段に行つてフランシスの一代記を見て、中飯の時まですごした。フランシスが片手でロマ敎會の建築の倒れを支へてをる力强さ、ダミアノの寺の前にフランシスの遺骸を留めて、クララ始め尼達が告別の接吻をしてをるやさしさなど、ジオットの筆には立派な戲曲がある。

中食後は野の下の天使の寺に行つた。朝の曇りは全く去つて一天はれ亘つた空に、日光は野にまばゆく照らす。フランシスが最後にアッシシを眺めた處の石に腰かけて、山の上の町を見上げる。碧空に聳えた塔や城壁、日にあたつた家々の壁、すきとうつた様に朗かに

見える。フランシスが故郷に別れを告げたのは十月で、秋の澄み亘つた空に、この山の眺めは、今日の様であつたであらうが、その殆ど盲目になつた目でおぼろに故郷を見上げた時の心持ちはどうであつたか。恐らくこの故郷に別れを惜み、おぼろにその眺めを見ると共に、天上の眞の故郷を思ひ、心にははつきりその光景を見て喜んだであらう。

日の照つた大道をたどる。如何にも暑くて、頭からかぶる塵が堪え難いが、野には麥の葉に日がうらゝかにあたつて、時々風にそよぐ。日にひかる麥の葉末に風そよぎ、

オンブリアの野に夏は來にけり。

天使の寺に着いて、その迸る清泉に手を洗ひ、口をそゝいだ時は、ほつと一息の感があつた。堂に這入ると案内の男は、その中にある元來の聖母堂をあけて、そこで待つてをつてくれといふ。この寺にフ

ランシスカンの教父で英語でもフランス語でも出來る人が居て、同宿のイギリス人が先にその教父に自分の事を話しておいてくれたので、その教父から寺男に特に「日本人が來たら」と云ひつけておいたと後に知つた。前に來た時は外からのみ見た聖母堂の中に坐つて見ると、ダミアノ堂よりも小い、元は只の辻堂であつたらしい。それがフランシスの最初の住寺になつたのみならず、その石はフランシスが運んで修覆をした跡で、順禮が來てその石を撫でたり接吻したりするので、手や首の屆く所は皆膏で光つてをる。内部は飾も何もなく、只眞中に拜壇があるのみで、それも古の面影が殘つた簡單なものである。この拜壇の前で、フランシスが聖書を開いて「行いて萬國の民に福音を傳へよ」の條を讀み、それから奮起して清貧の教、愛の福音を說き始めた處。又この拜壇の前でクララがその頭髪を切つて尼入道になつた處。それ等の事を繰り返して默想してをると、教父

がやつて來て手を握つて迎へてくれた。この教父は名をベルナルデノといつて元はドイツ人である。始めは英語で話しゝて居たがヘドイツ人が來て、それからはドイツ語で色々堂の話しをしてくれた。この堂の後の方に尚小な堂が、此も今は大きな本堂の中になつてしまつてある。それが即ちフランシスの死んだ處で、中央にはフランシスの死顔を取つた立像、壁のぐるりにはその弟子達の肖像がある。フランシスの立像を見ると、いかにも痩せた肺病であつたらしい顔に、云ひ難い慈愛と威嚴とが見える。病身の人の僅に十六七年の間に實に大きな運動を起した、その力は信仰一つであつた。

やせはてし病の身にも信一つ、
世をも人をも動かしにけり。

特にその病勢が重つて、どうしても恢復の望はなく、死期の近いのを知つてからも、自分の「太陽の頌」を弟子のレオに歌はせて、それに

次いで「死の頌」一句を附けた。「死は何人も免れ得ない、只罪を犯したまゝに死ぬ人は憐むべきである、神の御意に從ふものは死も之を犯し得ぬ」といふ意味で、佛教の諸行無常の偈を神の御意と翻譯した感がある。法然上人が、念佛の聲朗かに、眠るが如く滅に入つたと同じで、聖者の最後は東西同一である。今その跡に來てその死に顔を見、薄暗い堂内に默想すると、その古に歸つた心地がする。

その魂は父に歸りて、亡き骸を
留めしすがた今に消しも。

堂の壁に穴が殘つてをる。そこにフランシスが癩病者に與へる藥を貯へておいた處で、今はその身に纏ふて居た細の帶を安置してある。その帶に胸の傷（キリストの傷がフランシスの身に現はれた）の血がついて殘つてをる。胸の傷から出た血か、喉から吐いた血かは知らぬが、此も一生の艱難を凌いだ身から出た最後の血であらう。

身をば主にさゝげし君が繩の帶、
ときてや聖衆、魂迎へけん。
血しほ吐く口にも神をたゝへにし
一期の名殘りこゝに留どめつ。

本堂を出、役僧の室を通つて、廊下つゞきに花園と會堂とがある。園には薔薇がまだ花は咲かぬが、青葉美うし茂つてをる。此はフランシスが刺を取つておいた薔薇で、今も刺がないといふ。その先の堂は薔薇の御堂といつて、フランシスが弟子四人を得て後に、天使の聖母堂の側に同行の住居を作つた處で、その拜壇の下の穴倉はその時のフランシスの寢室であつたといふ。カルツェリの岩窟ほどにはないが、小な石の床に木の枕で寢た跡が其まゝにある。さういふ修行を難行とも何とも思はず、キリストの苦みに比べては、その弟子の當り前にすべき事とした勇氣は驚くべきものである。錦繡のしと

ねにねるこそフランシスには却て心の苦みであつたに違ひない。

フランシスは聖道難行の形に他力信心の易行道を修したのである。法然上人も難行を棄て智慧才覺を離れて、唱名往生の中に淨土を欣求せられたが、その心はなまくら坊主が聖道の修行に堪えないで、名を他力に借りて安逸を貪るのとは全で違ふ。上人が唱名念佛の安心易行の中には、聖道修行の眞精神がこもつて居た。自力を頼み、智慧や功德で自分の天國を買ふのでなく、ひたすら慈光の攝取を仰ぎ、他力の救ひに身を委ねるのが、この二人の聖者の心であつた。至信同向の念佛も、衷心喜悅の献身もこの心の現はれである。その同向の心は一切衆生に念佛を勸める易行の教へとなり、その献身は自身の身の艱苦や疾病を顧みる遑なしに、人のため、キリストの爲めに盡す慈善となり布敎となつた。形は違ふ樣でも、二人の聖者の信は一つである。

薔薇の堂を出てロビンソン(P. Robinson)といふ教父に會つた。教父は自分の來て居るのをきいて、今旅行に立ちがけ前に會いに來てくれた。薔薇の園に立つて手短かにフランシス研究の事を話して別れた。元に歸つて見るとベルナルデノ教父は今度はフランス人の一行を案内してをる。それと一緒に尚一度廻はつて見て、別れをつげて後、入滅の堂と聖母堂とに別れを惜んで大堂を出た。

歸り路には、西に傾きかけた日がアッシシの町を照らしてをる。夕暮に入日が色々の雲を染めて、深紅、濃紫の空を現はす。宿の屋根に上つて野山に最後の光りのさすのを見、入る日の光りを惜んで下に下りる。

惜まるゝ入日の名殘色染めて、
光り留めしひじりをぞ思ふ。

食後はイギリスの人等と讀書室で賑はしうすごした。特にその

中のダヴといふ婦人はローマに、他の二人は國に向つて明朝立つて、行くので別れに長い間話しをし、再會を約束して、十時半に皆は部屋に歸り、跡に一人殘つてこの日記をかき終る。

四月三十日。 初夏の天然、聖者の追懐。

つゞいての好天氣に、空の紺青は愈よ深い心地がする。朝早くに宿の屋根に上ると、日はスパシオの山の上に上つて、フランシスの寺を正面から照らす。カルツェリの谷間の庵室にも日の光は已に充ちてをるであらう。讀書して後、山の崖に沿ふた城壁の外の野道をたどる。どこも草花の世界、その中にもけしの深紅がその邊には一層多い。青黒いオリヴの木影に日光をうけた深紅がいかにもはでやかに見える。

オリヴの茂み影もこき　草間に
匂ふけしの花、

緑しなくばくれなゐの　色もあだよと知るや否。

城壁に近い處には、特に野菊に似たマルゲリテの花が多い。

そら青み草は綠の野に白く、

星にも似たるマルゲリテの花。

マヨナの城門をすぎて、道は谷間に這入る。谷の流れに沿ふて幷ぶ樺の若葉に日が照つて、その燃える様な色がオリヴと相對する。

オリヴの木々の深綠、あたりに匂ふ樺蒲黄、

あやはかはれど、同じ日の光りに生ふる兄おとゝ。

その先はクララの寺の下道で、尼僧院の石垣が高く聳え、その上に寺の塔が見える。草の上にねて谷間の景を見ながら、その古を考へる。この石垣も元はファヂリノ伯の屋敷で、その高臺の庭に出た姫君クララの姿はどんなにあつたか。その姫君が一朝出家して尼入道。城主の屋敷は尼寺になつて今日まで傳はる。クララを不孝ものと

怒つた父親が今こゝに來たならば、どういふ感じを持つであらう。考へて、ふとクララの一生を歌にして見たい氣が出て、一句二句。終に始めの二段だけ出來た。

花より清きたをやめを、岡邊のうてなに仰ぎ見て、
派手の姿の公達が　送りし戀文數いくつ。
クララが眼に見る文は　神の言葉に主の敎へ、
口に歌ふは戀ならで、天つ御國のたゝへ歌。
貧しきものは幸ひの　ひじりの敎へきゝてより
玉の家居も火の廓、錦のころもに針ぞ充つ。
すてがたき父の心に背きても、
天つ御親に身をぞ委ねん。

心さだめしあかつきは、聖道の修行かたからず、
家居をすてゝ世を救ふ　ためしを示すフランシス。

忍びぞ出でし城戸跡に、オリヴの木蔭夜も暗き

道たどり行く白絹の　姿にあめの光りそふ。

朝なほくらき寺の内、迎ふる聖者にみちびかれ、

髪をおろせし聖壇に　今日ぞ出で立つ法の旅。

光り充つ主が復活の朝ぼらけ、

すがのいのちの始めいそしも。

先づ發心と出家とは出來たから、次いで、父の怒り、ダミアノの庵室、

師の君フランシス、臨終を作つて一つクララの傳にしたいとは思ふ

が、その場を去つて後跡が容易に出て來ない。あす復寺の下に行つ

てつやきを試みたい。

クララ寺の下をたどつて新門の下に出、門から寺の前を通つて宿

に歸つたのは又中食の時。

午後は先づフランシスの寺に行つて畫を見る。複雜な畫の數多

い壁であるからいくら見ても新しいものが出てくる。今日は主と

して眞中の天井の四つの畫を見た。天使に圍まれた天上のフラン

シス、服從の德の前に天使や聖者の禮拜、清貧の女王とフランシスと

の婚禮、貞潔の德に天使が本と花とを捧げる下に、武士が淨行の僧を

守る畫。寓意と畫の配置が何れもフランシスカンの理想を表はす

と共に、ジオットの技倆を示す。

寺からジャコモの門を出て、坂を谷間に下る。下るに從つて山の

崖に聳えるフランシスの寺を見上げ、谷向ひのオリヴ山が近く、草の

綠が美はしい。風につれて谷間に草を刈る子供等の歌が、節面白う

きこえる。殆ど下り盡すあたりの岩角からの眺め、テッシオ(Tescio)の

谷の流れる先に、片方は寺の崖に茂る林、片方はゆるやかな山の裾の

オリヴ園、その先きに近い山は濃く、遠くの山々が段々その上に重な

つて遠くアミアト(Amiato)の火山が尖つて空に聳える。如何にも人

界を離れた天然のまゝの山野の風光、詩人が牧歌を歌ふべき眺めである。道を下り盡して古い石橋を渡る。その傍に池水の碧を湛えた岸に樺の並木が日にひかり風にそよぐ。その先に一軒の百姓家。子供が小な竿の先にオリヴの葉で十字架を作つて畑に立てゝをる。あすは五月の朔日、夏の始めのしるしに田畑の祝福をするものと見える。

さつき來と、オリヴの十字立てし野に
　幸あれかしとわれも祝はん。

河に沿ふて石高の路、オリヴの畑を通る。羊を飼つてをる女の子の歌が羊の鳴き聲に和してきこえる。

山の邊に羊かふ子の歌きけば、
　世にうきといふ事ありとしも覺えず。

寺の崖を周つて街道に出る。この邊りも樺の木が多く、その木立

(二四四頁參照)

テッシオの谷から聖フランシス寺

の間に開けた野の眺めは、谷の間と違つてのどかにやさしい。西日をうけた坂を上り宿に歸つて一杯の茶に喉を濡ほし、茶にも甘露の味を覺える。日のくれになるに從つて西の山々がはつきり夕日の空に輪廓を畫いて重なり〳〵、それも段々黒影になる。此處に來た始には夕食の時間には少し暗くなつたが、一週間の間に日の長さが增して、いつまでも野の綠が夕やけに映つてうるはしい。

夕食の後はいつもの樣に話し。ゆふべまでは七八人の仲間が、今日は三人になつて淋しい樣であるが、話しは却て本當によく出來る。今夜はおもに聖クララの話しをミス、ストッダートからきいた。然し敎會はクララに關する記錄を人に見せる事を好まないので、十分の事は分らない。只師のフランシスよりも二十年以上生き延びて、その間にダミアノの尼僧院を支配し、色々の干涉を拒絕してよくその弟子を導いた上から見ると、除程しつかりした男勝りの婦人であつ

たらしいといふ。ダンテは「圓滿の一生、天の上にも高きいさほ」(Per-fetta vita ed alto merto inciela) の婦人といつたが、その委曲を知り得ないのは遺憾である。

五月一日。 オリヴ畑、古書室、光耀裏の壁畵、入日の光。

今年も五月になつた。朝未明に寺の鐘が高くひゞいて、五月一日の祭りが來たのを知らせる。餘り早いので又一度寢入つて目がさめると、日が已に窓にさしてゐる。おきて直に寺に行く。今日も空の色が美しく、深い紺青の中に石の本堂が日にあつた樣はいつもながら飽くまで爽かなはつきりした眺めである。堂の中はまだ暗い。橫の堂にメスで經文誦讀の聲がゝすかにきこえる。聖マルチン堂の聖者の畵の前に立つて、歸つて朝の茶を飮むだ。

今日の祭が始まるかと思つて十時に寺に行つて見たが、何もない

ので、又城外に出て、オリヴ畑の間を昨日の樣にぶらついた。今日は少し空がゝすむで春霞の思ひがあるが、麥畑のけしの深紅が著しく殖ゑ、雪傘の花が白く野邊を蔽ふ。一日の間に野の樣もづんと變はる。山のふちから鳥の說敎の辻に下り、例の如く野にねては行き、あるいてはね、聖ダミアノ庵室の外に長い間ねながら聖クララの事を考へ、きのふのつゞきを少し作つた。

きのふは城主の姬君も、今日は捨行の尼姿、
庵の庭には藥植ゑ、
縫ふは貧者の麻衣。
いほりの窓ゆ、人の世を
眺めて神に祈る人、
耳に聲あり、「野は黃ばみ
刈り入れは今よぞ」と。
德にはかほる風四方に、
蒸じを傳へて法の妹、
數に加はる伯母と母、
今は修むる道の友。
たそがれぬ、夕べの鐘に妹あつめ、

今日の恵みを神にたゝへん。

此で「ダミアノの庵室」はざつと出來たが、次は出て來ない。臨終の最後の歌だけ少し考へついた。

六十年の恵みのいのち今日つきて、
あすは聖衆と共に見ん父。

此は聖者の尼の、最後の句としてあまりにまづいから尚考へなければならぬ。ダミアノから坂を上つて、いつもの路を日にてらされて宿に歸る。きけば今朝にもやはり勤行があつて、行列を作つて寺を廻はつたとの事。

午後は讀書室で日の光りをうけて本を見たり考へたり。其中に、窓から天使の御寺の方を眺めながらクララの傳記の一部が出來た。

あはれ師の君住まひます　御寺に夕日の茜さす、
神の光りにクララ尼が　歸敬の涙玉ぞなす。

うれし師の君許します、　共に夕げの神のかて、
尊きすがた仰ぎては、　涙にたぶるパンのはし。
病みつゝ尚もたゝへ歌　神にさゝぐる師の聲を、
きゝては祈る父の前、　この身を君に代へませと。
天つ國、またも會ひなん折までの
別れにいだく、君がなきから。

一度フランシスの寺に行つて、墓道を散歩し、それからフランシス研究室に行くと、ロビンソン敎父が廣い室に獨り勉強してをる。そこで本や地圖を見てをる中に、敎父は歸りがけに他の圖書館につれて行つてくれた。此は元はフランシス寺の僧院にあつたのを、今はアッシシの町で保管して、アレッサンドリといふ老儒が管理してをる。老人は一人の助手をつれて丁寧に案内して見せてくれた。四五室の本棚は一面に白皮綴りの古書。六百餘年の間フランシス寺の僧

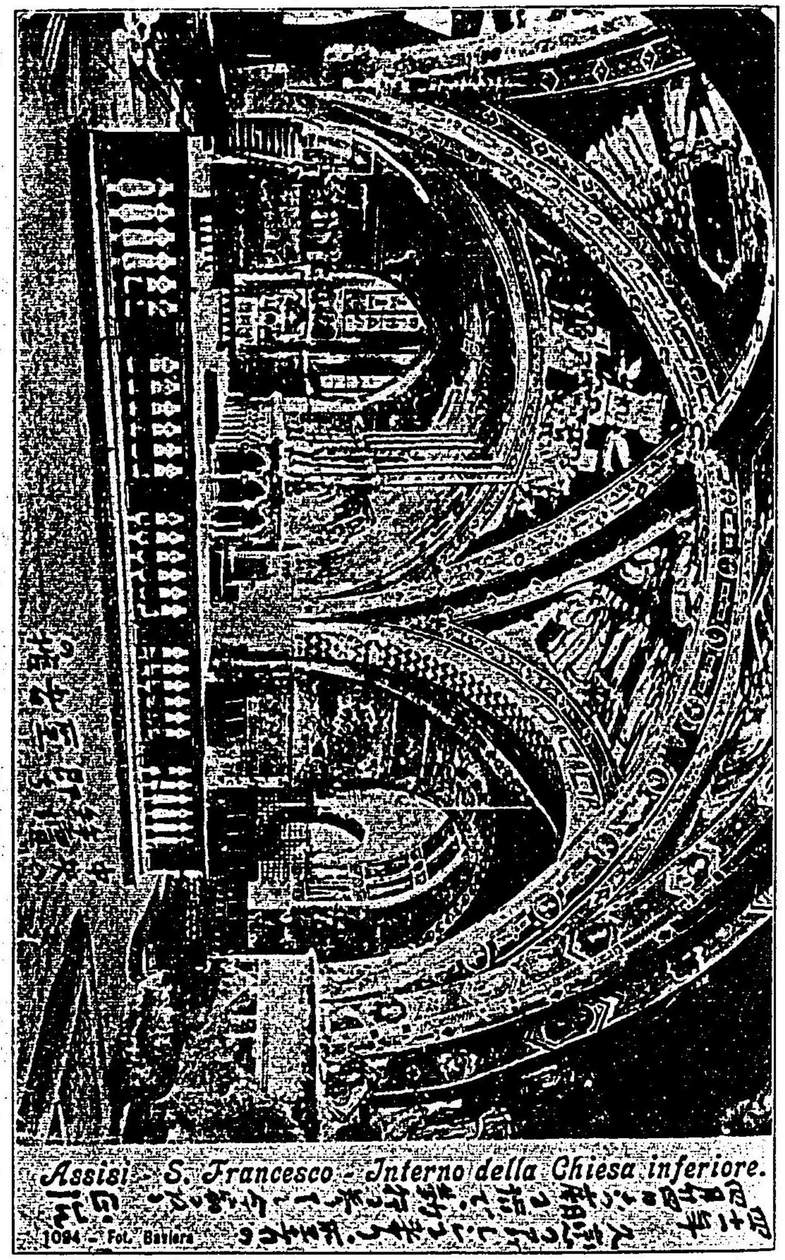
等が書いたのを集めたもの。此の圖書室は實にフランシスカン派の智慧を語るものである。見せて貰つた珍本の中には、フランシスの當時の聖書の大册、羊の皮に丁寧な字で立派な寫本、法王廳からフランシス寺に送つた許狀や、その他の記錄類。此も固より羊皮に模樣の様な字で書いて、多くは修程古びてをる。フランシスの歌や書簡を一册に集めた立派な金や紅入りの本はよく保存が出來て五百年前の字も昨日書いたに異ならぬ。「太陽の頌」の處だけは人々が必ずあけて見るので垢づいてをる。フヰオレッテの十五世紀の寫本や、ボランデストの集めた古い傳記の古板本なども各面白い。それから樂譜を集めた別室には、本堂で使つた樂譜の外に、代々の僧たちの樂譜草稿などが一杯。ペトラルカの歌の譜などもあり、古い樂器も少しはある。僧院の人達が音樂を重んじた事は、その譜が二室に一杯あるのでも分かる。

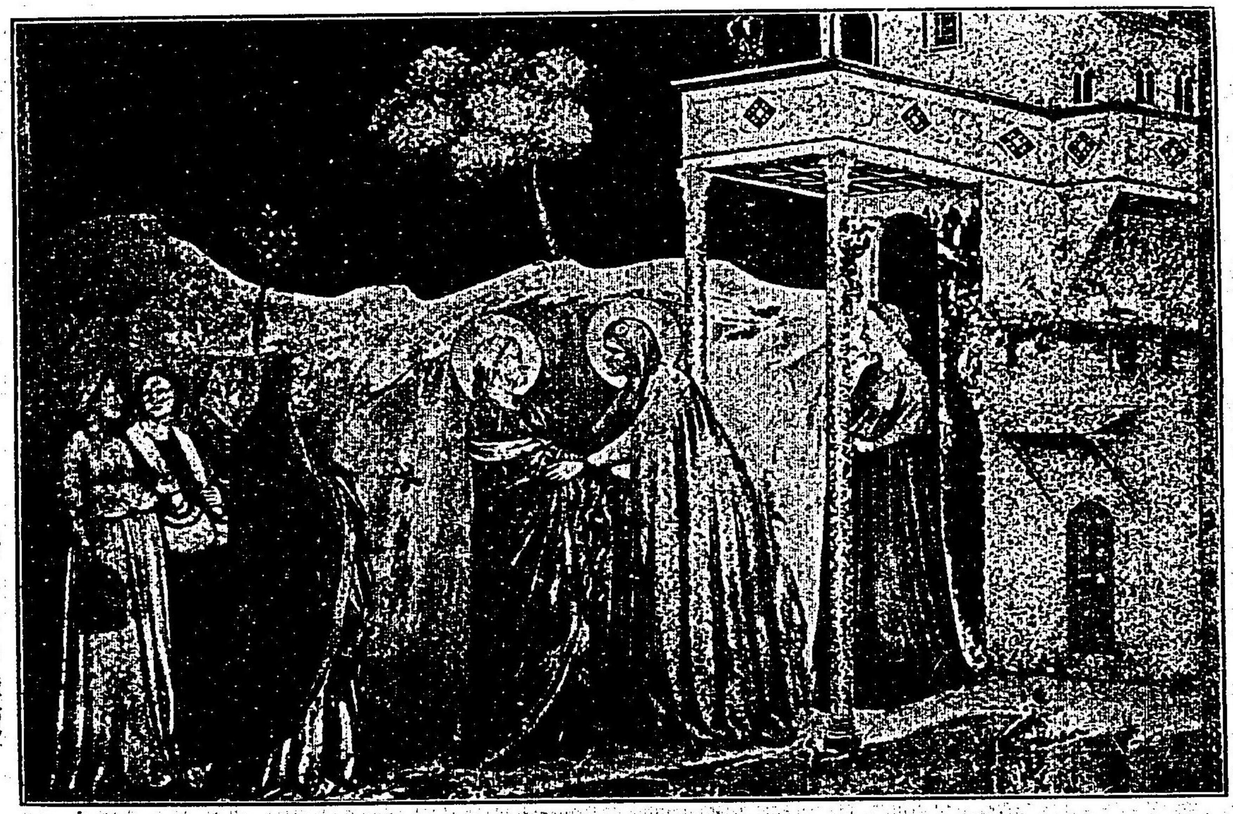
六時になつて寺の鐘が鳴り出す。今日の祭の夕の勤行が始まるので、寺に這入る。神壇に林の如く立てた蠟燭が、星雲の如くヴォールト天井の下に輝いて、天井の畫が燭光に明かに見える。横の堂から拜壇の側に近くと、ゴード氏も來て居て、二人とも無言の感嘆に天井の畫を見る。その中に勤行の經文が始まり、オルガンに伴つて歌、歌と共に祈願文、音聲は天井に響いて香の煙が堂内をこめ、音樂と煙との間に天井の畫は金色を放つて見える。フランシスを圍む天使、貞潔を守る老武者、清貧の手をフランシスに結びつけるキリストなど、神々しく、いかにも天上の聖衆の姿と見上げられる。祈願文が濟むで、僧は立つて聖體(佛敎の舍利塔の如きもの)を捧げて、參詣にベチデクション(神の惠みを與へる)をする。その間にはオルガンのみで、天上からの鳩の鳴く樣な譜を奏する。敎會の音樂で、このベチデクションの譜は特別の調子で、ワグチルもバーシファルの中にそれをとつて居

るが、何となく心が空中に浮き上がる様の感を與へる。この音樂をきゝなれた修道僧等が、臨終に聖衆來迎の音樂を天上にきいたのは自然である。特にフランシスの棺を蓋ふ、この不思議な神々しい天井の堂内に、この樂をきけば人間世界と離れた思ひを與へる。

ベチデクションで勤行は濟んで、僧も去る、參詣も出て行く。ゴード氏と二人だけ殘つて晝を仰ぐ間に、役僧が一つ〳〵蠟燭の光りを消す。金色の光のフランシス、白衣の天使も段々かすかに見える。横の方の壁畫も薄暗くなり、聖者の金光輪のみが尚見える。殘り少なの燭光の中にも、尚神々しい晝の姿は影の如く見えたが、最後の一つの光りも終に消えた。天井も壁も黒くなつて跡には蠟燭の煙が雲の如くたなびく。

堂を出ると夕日の光が茜色して、空は一面にその光りに輝いてをる。ゴード氏と二人で宿の屋根の塞に上る。丁度日は最後の光り





マリアとカタリナ（ジョツトー筆）

（アッシシ聖フランシス寺下段の壁畫）

を放つて西の山に沒した。跡には金線の様な雲が異様の光りを放つて殘つてをる。その中に金光に段々紅色がかゝり、四方の空の種種の雲は各その形に應じて、深紅、紺紅、褐色あらゆる色に濃淡の光を放つ。その光りが少しづゝ薄らぐと共に、雲の色は濃くなつて、遠の山々は夕暮の翠色の濃淡まち〳〵に、近くの野の綠も灰色の蔽ひをかけた様になり、河原の石原は妙な灰色に見える。ゴード氏はこの色をpurpleだといつたが、いかにも灰色の中に一種の紺の光りがある。空の光り、雲の色々、野の暮色、この様な立派な夕暮はイクリアでも滅多に見られない。二人は時々吐息を漏らしていつまでも臺の上で眺めて、互に言葉も盡きて感服してしまつた。顧るとスパシオの山の頂にのみ尙少しあかるみが殘つて、吹きおろす風は寒くなつた。遠の山々は影の如くかすかに、下の野原には處々窓から漏れる光りがきらめく。

下におりて食堂に行つて見ると、人々は食事最中。今日の晝食から、片方の隣にはロシャ人の老婦人、片方はデヂマルクの婦人で、ゴード氏は此等の人にも親切にアッシジで見るべき處など教へる。それで食卓は今までの樣に、賑かに、皆で話しつゝ愉快に食事をする事が出來る。

食後は又讀書室で談話。婦人達の去つた後にゴード氏と哲學の議論が出て、さあ寢やうといつて時計を見ると十一時半。

五月二日。 聖者の像、摘み花、茶會、田舍の古寺。

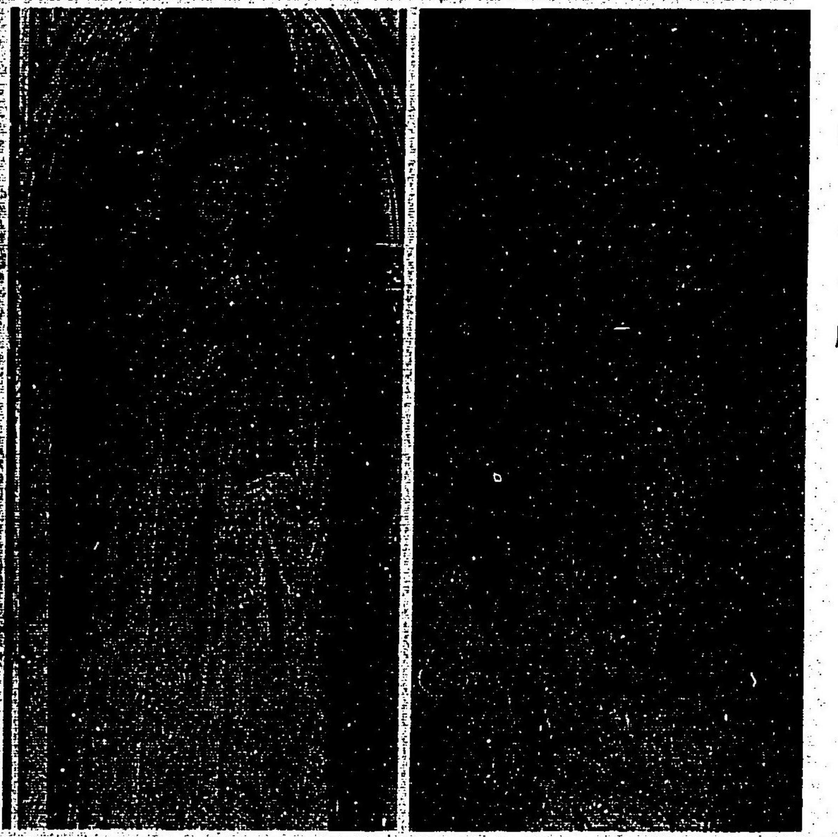
今日はアッシジを立つてローマに行くつもりであつたが、ミス、ストッダートが今日午後に客を招いて茶を飮むから、是非留まつてその席に出、他の友人にも會つてくれといふから、尙一日はアッシジでゆつくりくらす事にした。天氣は相變らずの晴天に、今日は少しかすんで、ア

ミアトの雪がかすみの間に浮いて見える。寺の方は朝から巡禮の參詣で大賑い。その參詣の濟むだ頃に寺に行つて見ると、蠟燭のあかりはまだ殘り、橫の堂の勤行に合はせてオルガンが響いてをる。燭光に照る天井の畫から、橫の堂の聖者の像を見る。その中で(多分ロレンツエテの筆の)聖クララは尙他のクラヽ(マルテニの筆)の樣に溫和なばかりでなく、柔の中に剛毅の德が見えて、特に尊く見える。

ジヤコモの門を出、墓場の道を散步して、こゝかしこ綠草の上にねる。その間にクララの一生を考へ、今堂で見た像の姿と思ひ合はせて、その最後の段を作つて見た。クララが見た聖衆の來迎は光明遍照の天人の群であつたといふが、それを十分に逃べ得ない。

師の君逝きて二十年、
跡を忍びてきのふ今日、
すごしゝ庵に日はすぎて、一期の終り近きぬ。
五障の雲のくもりはれ、きよらの道を步み得て、

我れをも人をも救ひしは　神の御恵み師の教へ。
いざさらば、天つ御國の父に行く、
　わがあとつゞけ、法のいもたち。
十方世界に光みつ　御空の國を望み見て、
人にさゝげし六十とせの　幸ちのいのちを神に謝す。
天降る光りの雲に魂を迎への
　聖衆來ませり、今われ行かん。
歸りに寫眞屋に行つて、先きに見たクララの像を求めたが、ない。
日なたの路を宿に歸つて又中食。
　午後は今までに集めた摘み花の整理をした。色は稍あせたのも
あれば、葉の枯れたのはあつても、一々樂しい遊びの紀念。立派なみ
やげを持つて歸らずとも、此の花で自分は滿足する。故郷のみやげ
は實利の品や寶玉ばかりでないと思ふ。



（寺のシシッア）

（ポフレンツェの聖十字寺）

（一五五頁參照）

玉ならで、摘みにし花を家づとに、

すぎにし野邊の語り草にせん。

それからミス、ストッダートの茶で、サバチエ夫人始め、アッシシの人やイギリス人が十人ばかり、宿の大きな棚干に出て野原の眺めを賞して、色々の話の中に茶を飲む。日は暖かに風のそよ吹く間に寺の鐘をきゝつゝ、人々の間で親しく話しをすれば、他郷にある樣にもない。

茶の後に三四人と同道で、城外の野原に散歩に出た。いつもの野道は夕日にてらされて、草も木も金色を帶び、特に赤の馬ごやしが日に照つて、けしと共に草原に燃える樣に見える。一軒の百姓家に行つて、その家の內にある十二世紀の御堂を見る。ロマヂスクの古い柱、うぶな彫物、八百年前の寺が百姓家になつて、而かも聖母の像は眞中に祭つてある。その次の家に行くと、やはり七八百年の古い塔の片われを倉庫に使つて居る。此等の家の前を過ぎた事は一二度は

あるが、氣が附かずに居た。案内せられて見ると、そこらの野にもこういふ古物が殘つて居る。古い國には一寸しては氣のつかない面白いものがある。それ等の見物をして又野の道から山に上る。夕やけは益々茜さして、緑の草も、灰色の石も皆紅に見える。オリヴの木の葉を通して入る日の最後の光りも消えた。城壁の下に佇んで見れば、天は薄紅に澄んで、細い新月が已に掛いてをる。

夕の後は又集まつて話し。今晩はおばけ話しが出て、他の婦人達も加はつて、段々おばけばなしに身が入る。今日はアッシジの最後の晩。人々に別れを告げ、窓から寺の廊下の燈火を見て、此れも別れと思つて部屋に歸つた。

永遠の都、法王の寶座

五月三日。 ロマの宿り、聖ピエトロ。

アッシジを去つてロマに來た。山中の靜かな古風の町から賑かな混雜の町に來ていやな氣がする。

天氣は相變らずの晴天、アッシジの町を山の上に見送つて、フランシスが死ぬ前に故郷に別れを告げた時の心持ちが特に偲ばれた。十時少し前に汽車はアッシを去る。野はどこも花ばかり、十日前には餘り見なかつた赤色の馬ごやしの花と雪傘とで野は一面の錦。「イタリアはどこに行つても花の野邊。」その中にアッシは段々遠かつて、山の上の岩ばかり見え、カルツェリの庵室も山にかくれ、なじみのスバシオ山のみはいつまでも見える。

忘れ得ぬ思ひ出ゆかしき野も山も

一遠ざかりゆくあと惜しぞおもふ。

スペロやスポレトなどいふ町も皆山の上にある。道は山を上り、いくつもトンチルを經てテベロの河に出る。此處にもやはり山の上に城壁いかめしいオルテの町から見え、野は同じやうに花。

山じろの裾には錦、花の野邊。

そのうちに段々テベロの河の平原に出て、牛や馬が草原に戲れてゐる。ロマに近く前に聖ピエトロの塔が見え出すのを氣をつけて見やうと思つてゐたが、少し眠つて眼がさめると、汽車はすでに古の城壁の中に這入つてステーションに近い。

汽車を出たのは二時半。馬車で目あての宿に行く。日曜の好天氣で散歩の人の多い事、その服裝にも白色の夏着が多くて全く夏になつた氣がする。色々の寺や泉や町など多少見覺えのある處を通つて、パンテオン前の宿に行つて見ると、皆一杯で室がないといふ。

他の宿に行つても同じ事。五六軒尋ねても同じであるから、市の眞中では到底だめと思つて、北の方の高見の方に行つて見ても同じ事。このプリタニアといふホテルの番頭が、內へ來て三度の食事をするなら、部屋を周旋する、その中に內にあいた部室ができたら來てくれといふ。仕方がないから、さう定めて、別の家に案內させた。書記かなにかをしてをるらしい若夫婦の家で、一室貸すといふ。家はきたないが、人間は惡くもなささうで、直に水やシャボンを出してくれ、此からは部屋を掃除するといふ。然しその水入から油蟲が二疋とび出したには少し閉口したが、夜るねるだけだと覺悟して行李を解き、それから見物に出た。

宿がない、這入つた室はきたない。今までの自分なら困つたといふ感じを持つのであるが、一向それらのことに無貪着になつて、何、どこかでは寢られやう、ごろ〳〵でもかまはぬと極く平氣で居られた。此

は全くフランシスのお蔭で、此頃は總て心地がゆたかになつて氣が大きくなつた。

家を出て、直側のスパニア石段（Scala Spagna）といふのを降つて、ピエトロの大堂に行く電車を待つたが、どれもこれも滿員。泉の邊で待つて居る間にそこらを見ると、見物の旅客でベーデカーを手に持つた人、順禮のしるしを胸につけて坊さんに案内せられてをる道者連、黒白の法衣のドメニカン僧など往來が中々面白い。然しどの電車も滿員故、あるいて行く事にして、テベロの河端に出ると、建築中の裁判所の建物が大きく目立つ。六年前にくらべると、そこらにかういふ新しい建築がよほど殖えてゐる。それから天使の塔（Castel di Angelo）といふ名のある古のハドリアン帝の墓の前から、ピエトロの大圓塔が見える。堂の前の茶店で一杯ビールを飲むで堂を見る。此の前にもこの堂の正面には失望したが、今度は特にアッシシの奥ゆ

かしい古物を見て來た眼には一層面白くない、小な建築にでも出來る圖案を只大きさばかりで大きくしたのであるから、一向その大きさが感せられない。只その下を行く人が堂にくらべて蟻のやうに小さく見えるのでその大きさを知るのみである。堂の中に這入つてもやはり同じで、世界の何れの寺よりも大きいと誇つて、堂の中央に目盛をして、どこの寺はこゝまでと一々尺度を示してある。一番大きい堂でもこのピエトロの三分二もない、それ程大くて、その上に裝飾は色々の大理石や金箔をこてこてに使つてあつても、少しもそれだけの感がなく、俗氣が充滿してをる。田舍の順禮は驚いても、目のあるものは却ていやに思ふ。

堂の正面は、始めブラマンテの設計した上に正面につまらぬ御殿作りをくつゝけて、その爲に折角の大圓塔も隱れる、堂前の廻廊の上の石像もおもちやの人形然として居る。この堂は遠方から大圓塔

だけを見るに限る。フランシスの寺などは中に這入るほどよくなるが、此の堂はその反對。

夕食は宿屋に行つてした。昨夜まで面白く話をしたのが俄かに一人になつて、再び異鄕の旅に出た心地がする。然し人間の一生もやはり旅、三界無宅で雲水の生活をしたフランシスや、その他佛敎の高僧の事を思へば、此位な事は何でもない。

部屋をかりた家に歸ると、何もかもちやんとして、主婦は窓からのぞいてゐて、戸口をあけて蠟燭をもつて下りて來てくれた。話しぶりでもよさゝうな人間である。世間に鬼はないとはよくいつた言葉である。

五月四日。 公園、鄕信、湯殿の寺。

ゆつくりねて宿に行つて朝飯後、大使館の方に行く道、ピンチオ

(Pincio)の公園に上つた。小高い丘の上からの見晴らしに、ピエトロの堂、ヴチカノの宮殿それから市中の寺々の塔。その先きは平野が遠く海の方に延びて、先は霞んでをる。晴天の日光はぎら〳〵する程照つて木陰の涼しさが特にありがたい。この樣に日は強く世界を照らしてをるが法王のみはあのヴチカノの丘にとぢ籠めて、小な城壁以外に一歩も踏み出されぬ。日の暑いユダヤの野原をあちらこちら歩いて人を救ふたキリストの相續者として實に不思議の事である。法王が此く籠城を固く守る樣になつたのは、實に狹い量見から出たので、中世紀にはロマの町は政治上に法王廳の領地であつた。そこにイタリアの統一の後に今の王家がロマに都を定めて、法王を先の宮殿キリナレの丘からヴチカノに追ひ込んだ。それ故、ヴチカノ以外は法王の敵の領地になつて、その敵の領地には足踏みせぬといふ事にしてしまつた。キリストの相續者の領地は狹いロマ

の土地でない筈、廣い世界は皆その心靈の領地であるべきのに、かく狹い量見で片意地を張るとは實に不思議の事である。フォガッツァロはその小説の中にも、法王が親しく人民に接する樣にと勸めて居るが、中々今の政廳ではそれを容れるどころではなく、その小説を禁止した。日の照つた廣い天地にピエトロの堂、ヴチカノの宮殿が他の天地と同じやうに日光をうけて居るのを見ては一層この事を思ふ。

世を救ふあとはつげども、ヴチカノにこもる召うど足ふみも出ず。

法王をヴチカノの囚人といふのは酷評でない、事實で、先のピオ九世自身の言葉である。此の頃の樣に各國の順禮が澤山集つて、法王は毎日それらの信者に謁見を賜はるといふ事であるが、引きつけて謁見を賜はると同時に何故に自ら出て行く事が出來ないか。ヴチカノを見て氣の毒でならぬ。

この公園の下に下りてポポロの聖母(Santa Maria del Popolo)といふ寺に行つて、そこにあるピントリキオの繪を三つ四つ見た。早い間のルチサンスの落ちつきはある、心もこもつて居るが、アンジェリコやジオットの如くに色が清くない、ペルジノの如くに表情が強くない。ピントリキヨ程の大家の作を見てもアンジェリコを見た眼には物足りない、否物足りすぎて、書きすぎて居る。

それから大使館の名宛に行くと、移轉したとの事で、馬車で其方に行つて案內を乞ふて暫く待つ。十七世紀頃の書が澤山あり、裝飾の立派な古の宮殿である。龜山書記官に會つて手紙類を貰ひ、それから日本の新聞を見る。

四月九日までの分が來て居て、ボートの結果は分らぬ、見るに從つて色々の新聞を見る。中に有栖川若宮の薨去は實に痛はしい。その外の事は一々書く必要もない。

午後は四時頃から外出して、先づ古のローマの湯殿を寺に變へた天使の聖母寺(Santa Maria degli Angeli)に行つて見た。宏大な寺の建物は古の湯殿の眞中の一室であつた、その他の分は病院や博物館に使つて居る。それ等も湯殿全體でなく、殘つた壁の一部分を作りかへたもので、ローマ人が如何に大きい湯殿を作つたか、殆んど想像に餘る。外壁を合はすと十一萬坪あつたといふ。それ故その大部分は町や、ステーション前の廣場になつてをる。寺の壁には澤山畵があるが、此といふほどのものはない、只その大きなには驚かれる。色々の神に捧げた古の殿堂が寺になつたのも澤山あるが、湯殿が寺になるとは面白い。

寺を出てステーションに荷物をとりに行つた處が、散々待たせておいて後に、今日は稅關がしまつたから、あす來てくれといふ。代理店のものに賴むで、歸りに市中の賑かな處を散歩した。道傍に机の出

てをるカフェーで一杯リモナデを飮むで町の賑ひを見てをると、前に靴みがきが居て、居睡りをしてをる。そこへ靴をみがゝせる人が來て足をつき出し、靴みがきはびつくりして目をさました。その樣子がをかしかつたので、「靴みがきつき出す足に目をさまし」と洒落れて見た。

ローマの町は四月から五月上旬にかけて旅客の集まる時で、この四五日の間は毎日競馬がある。お寺參りの順禮もあれば、競馬に來た各國の武官も交り、見物の旅客に田舍者、それに毎日の好天氣にうかれあるくローマ人。あるく人、馬車、自動車、何もかも一緒にがや〳〵として、晴天の日光の中に塵をかぶつてあるく樣、東京の花見の頃に似てをる。男の風も中々洒落た人もあるが、婦人の着物は薄色、特に薄紅が多く、パリの冬に多かつた紫色や、イタリアの田舍の樺色と對照になる。イタリアの婦人には髮の黑いのが多いが、又眞赤のもあり、

それに着物の色々が交つて、街上は薄色の博覧會。

夕方には一つ月を見たいと思つたが、家の高い間で見えない。宿の後は王宮の高い石垣で閉ざされて尠とうしい。アッシシの山が懸しくなる。

五月五日、フォロの廢墟、ジャニコロの丘。

晴天ながらに風は強い。色々紹介狀を貰つた人々に宛てゝ手紙を出して後、今日の午前はフォロの廢墟でくらす事にして、その方に馬車を驅つた。日光は廢墟の石の柱や敗石の上にまばゆいばかりに照つて、その間に色々の花が咲き、特に菖蒲の花が目立つて美しい。今日は五月五日で、端午の節。七年前の今日、印度洋でこの節句一日を面白くすごした事、その時の乙羽君の芝居なども思ひ出し、その人も今は亡き人と考へると變な心地がする。坊や二人の節句はどうしてゐるかと思ひ、又自分の子供の時の大將人形なども思ひ出す。二千年のロマの古蹟で、端午の節句をするとは妙な廻はり合はせである。

故郷のさつきの空を忍べとや、
宮居のあとにあやめ花さく。

段を下りてフォロ(Foro Romano)の廢墟、石柱の間に立つ。ロマの盛時には、大帝國の首府の中心になつて、神々の殿堂が柱を並べ甍を競ひ、その間には人民の集會所即ちフォロに色々の集會や儀式を行つた跡。それが二千年乃至千五六百年の間に壞はれたり、やけたりして、殘りの柱や石段は永い間地に埋もれて居た。それを掘り出したのが此の廢墟。セヴェロ帝の凱旋門はまだ立つて居るが、その傍に軍神サトルンの殿堂は六七本の石柱を殘し、その他には處々の柱や、壁や、ころがつた石のみで、立派な彫刻もかけたりわれたりしたのが多い。

晴天ではあるが風に塵を吹きあげる天氣に、色のあせた石が一層乾いて殺風景に見える。然しその間にも岩すみれの黄色の花は石垣の間や柱の上にさき、名は知らぬが可愛い薄紫の花咲く蔦が石の間にはい上がり、その他色々の草が石のすき間に花を咲かせてをる。古の盛時に堂々と元老や政治家や僧官が集まつたり、武士が甲冑の色々を盛裝して是等の殿堂の間に行列した、ロマ帝國の春は再び來ないが、小な草花は春毎に古とかはらず咲く。

色あせし宮居の跡に人のわざ
あざけらんとてや千々の花さく。

大きくもない谷間の土地に色々の殿堂があつたのであるが、一々歴史を物語る必要はない。今は只石がころがり、壁が半分立つてをるばかり。その中に圓い壁の殘りがあつて、その中は低い穴倉の様になつて居る。此は神の火を貯へて大切に守つた處で、又この中で

殺された人も數多い。神聖で又恐ろしい紀念である。その先にはエスタリといつてこの火を守り又祭りに火をさゝげる乙女の居た跡。十歳以下の女の子をこゝに入れて齋女として、三十年の間はこゝでくらす事になつて居た。その家の中庭の池には今も水が滿えて、その傍には紅の薔薇が澤山咲いて居る。齋女等の部屋は壁の殘つたのもあれば、床の敷石だけのもある。齋女の中で功績のあつたのを大理石像に彫つたのもあるが、その像で首の殘つたのは只一つ。外のは手も首もなく、半分に折れたのもあり、土に埋もつて居たのを今は立てゝある。池の緣に腰かけて石像を見、古を思ふ。

千々の乙女が火を守り、神に事へし跡ふりて、
石のすがたの首も折れ、立てる傍、薔薇のさく。

その外コンスタンテン帝の大殿堂の石の天井、チト帝がエルサレムを征服した凱旋門など、何れも古の盛時を忍ばしめる。凱旋門の

前には今何か掘り出しつゝあるが、十尺以上の地の底まで石やコンクリートばかり。何にした跡か知らないが、總て大仕かけの工事をやつたものである。この門から東の方にはコロセオといつて古の競馬場の棧敷の高い石段や、コンスタンテン帝の凱旋門がよく見え、反對の方には今通つた數々の廢墟を隔てゝ古のカピトルの丘、今の元老院の塔が高く見える。どれも〳〵懷古の種。

齋女の宮の上を山に上る。その邊は金細工などした人の住家といふのが、此も壁ばかり殘つて、その中には草花が亂れ咲き、泉も湧いて居る。

汲む人のあとは絶えても泉のみ
湧きてながれて幾代經にけん。

それから丘の麓には古宮殿の壁が高く、廊下が殘つてをる。その間をすぎて、冷かな石の廊下を通て下に、古の圖書館を一時寺にした

『古の聖母』(S. Maria Antica)といふ寺がある。その寺も土に埋もつて居たのを掘り出して、壁畫が出て來た。破損はしてゐるが、四五世紀頃のビザンテン風の畫が明かに見え、キリストや聖徒の像は皆驚いた様な大きな目をしてをる。この畫をシマブーに比べると大體の畫き方が非常によく似て居る。六七百年の間にキリスト教の繪畫は大した變化もなしに居たのが、シマブーの弟子のジオットになつて大變化をしたのは驚くべき事で、此の畫などの固くるしい畫風、人形に似た様な人物畫がジオットになつて俄かに生氣を吹き入れられた様に活き〳〵と動き出したのである。

尙廢墟の跡をあるいて、あちらこちらで花を摘み、フォロを出て、直向ひのカピトル(Capitolo)の丘に上つた。此の丘はロマ人がまだ向ひのパラテノの丘だけに籠つて居た時代にはサビン人種が住んで、一時はロマ人と戰爭もした。その二族が一致してロマの勢力を張り

出してから、この丘にローマの大切な神を祭つた。その殿堂を建てる時に、土の中から生首が一つ出て、ローマが世界の頭になる前兆を示したといふので、この丘をカピトル即ち首の丘と名けた。帝政の時代に下のフォロがローマの中心になる前には、この首の岡がローマの中心であつたので、共和時代の政治も祭祀も皆こゝから出たのである。そこに今は元老院や博物館があつて、その間の廣場（といつても小い）の石をしきつめた處に日があたり風が塵をあげて不愉快に暑い。博物館の後に『天壇の聖母』(Santa Maria in Aracoeli)といふ寺がある。その中に這入ると、堂内の冷かな空氣がいかにも心地よく、拜壇の後にはきゝなれたフランシスカン派の讀經の聲がきこえる。外と中との對照に特に古のローマからキリスト教の世界になつた變化が明かに感せられる。ローマ帝國衰亡史を書いたギボンは、フォロの廢墟からこの寺に這入つて、つく〳〵古今の變を思つて、その大歷史を書く考へを起したといふが、いかにもそういふ感じが誰れにも起る。特にアッシのフランシスの寺で毎日その讀經をきいた耳が、古ローマの廢墟からこゝに來て、その聲を再びきいて、何となく考が沈み、別世界に來た心地がする。

この堂は、元カピトルの主神に並んで、その妻のジユノを祭つた殿堂をそのまゝ寺にしたから天壇と名ける。今の堂外の敷石や石段はその時代の歷史を留めて、色々の人が殺された跡であり、堂内の柱や敷石も古からの名殘りである。その聖母堂がフランシスカン派のものになつて、堂内の小御堂にはフランシスの畫もある。褐衣繩帶の僧がぶらついて居る傍には婦人が祈禱をしてゐる。小御堂の一つにあるピントリキヨの畫は恐らくこの畫工の畢生の作で、背景の山水にはアンジエリコの畫風があり、前の人物にはルチサンスの活氣が現はれ始めて居る。その向ひの小御堂にはキリスト誕生の人

形があつてキリスマスから一週間子供が集まるといふが、今は閉ぢてある。

古の大理石の床、エジプトから持つて來た石の柱の間に立つて、身體に冷氣を覺え出したから、正面の入口から外に出る。百段に餘る白大理石の石段に日光がまばゆく、石段の下には車馬の往來がはげしく、元の現世に歸つた心地がする。石段の中程からふり反つて見ると、元の天后ジユノ殿堂のまゝの平たい煉瓦の正面が何の飾りもなく、突立つて日に照り、その左にはイタリアの先王の紀念碑が今工事最中で、その白大理石の柱がいくつとなく足場の間に立つてをる。今紀念碑の立ちかけて居る處は、元聖母寺に附屬してフランシスカンの僧院があつた處で、その派の上座の住居であつた。昔はその僧院の中に塔があり泉があつて、澤山の修道僧が住むで居たのである、が、今の王朝政府がそれを沒收してその先王の紀念碑を建てる處と

定めた。一時財政困難の間その建築を見合はせて居たのが、此頃大分金が出來たと見えて、三四年前から建築にかゝり、その宏大な石柱の廻廊が、古のロマの中心、中世にはフランシスカンの僧院の跡に四方を睥睨して立ちかけて居る。ロマ帝國の神殿からキリスト教の僧院、それから教會の敵といはれる今の王朝の大紀念碑。こゝにも二千餘年の歷史が目のあたり表はれる。

日光が暑く風が強いので午後は宿で休んで、日のくれ前にジャニコロ(Gianicolo)の丘に散步に出た。この丘は元はロマの守護軍神ジャヌス(Janus)の祭つてあつた處で、テベロの河向ひ、ロマの町の西の方を周つた長い丘である。その上はどこからもロマの町の七つの丘臺を一目に見はらす。此の前に來た時は聖ペテロに行つて直にこの丘に上つた。今日はその反對の方から上つて、先づ第一に丘を上りつめる。その角に『山上の聖ペテロ』(S. Pietro in Montorio)といふ寺が

ある。その前からは七つの高臺を始め、遠く海に連るカンパニアの平原、雪の殘つて居るアペニヲの山々を見はらす。

パラテノ(Palatino)の丘はロマの興つた根本地。青黒いシプレスの木立の間に古宮殿の廢墟が灰色に見えていかにも淋しい死の世界。カピトル臺の塔に並んで紀念碑の工事は、之に反して今を盛りの王朝の威勢を示して高く聳える。西につゞいてキリナレ(Quirinale)臺の王宮は、兵營の様な家ながら、木立の茂つたその庭園と共に此の王朝の威光見よがしに著しく四方を睥睨して見える。此等の高臺とテベロの河との間には萬家の屋根。その間に寺の塔や諸處の貴族の宮殿が聳えて、中世ロマの繁昌隆盛を語る。町はづれの先西にはピンチオ(Pincio)の丘、ボルグーゼの森に笠松やシプレスの木立が書の様に、その又先は丘陵起伏の野原が遠くかすんで山々につゞく。轉じて左の方には丘の上、木立の間から聖ピエトロの大圓塔が巍然

として頂上の十字架は天を指し、敎會の威光を示しつゝその敵であるキリナレの王宮と相對する。此等の眺めは單に風景としても面白いが、その高臺、建物、木立が一々皆何かの歷史を物語つて、この一つの眺めの中に世界の運命を支配した二千數百年の形見を偲ばしめる。

眺めてをる間に色々の物賣りが賣物を勸めに來る。知らぬ顏をして捨てゝおくと、その中の一人の小僧があちらに行つて何か相談をして來て、何か分からぬ事をいふ。何を云のかときいてゐると、終にヲオッエ／＼といつてゐる。即ち小僧は他の物賣りと相談の結果、支那人と議決して、何か支那語を一つでもいはうと思つて、どうしてきいたか老子の名を知つて居てそれをいふのだと知れた。小僧は固より老子の何人であるかは知るまいが、ロマ七臺の眺めに老子の名をイタリア小僧の口からきくのは餘程妙である。ドイッでは

よくリーハンチャン〳〵と云つて李鴻章の名をいつてついて來たり石を投げたりする人間があつたが、此處では老子を呼ぶ。

見はらしから山上の聖ピエトロの寺に這入る。此の寺はイスパニアの王が建てたので、今もイスパニア僧侶の學校がある。寺にはフランシスカンの僧が居て、横の小御堂にはフランシスの書がある、然し此れといふほどのものでもない。この處で使徒ペテロが十字架上に殺されたといふ傳說があつて、僧院の中にはその跡といふのがある。尙一つの傳說には、大洪水の後にノアがその船をつけた山はこゝで、その時船をつないだ岩の上でペテロは殺されたといふ。どこも色々古傳にくつつけての傳說が多いがローマには特に多い。ローマに居れば人はどうしても過去の歷史を考へる、歷史の跡を思ふてその事件をあちらこちらにくつつける樣になる。而してこふいふ俗傳が澤山に出來る。

それから丘の上を北に向ふて木立の間を散歩する。芝草の綠に公園の植ゑ花、シプレスの木立の傍には紫芳の紅の花、その木に藤が纏ふて紫の花を咲かせ、紫紅が夕日に映ずる。ガリバルデの紀念碑のある處からは、一方にローマの七臺、一方に郊外の野山を見晴らして、こゝにも笠松の森、田舍家にも花の園が美しい。ワチカノ丘の天文臺(法王宮附屬の)につゞいて、マリオの天文臺(政府の)。天文臺まで法王廳と政府と競爭してをる。

岡の頂上が下り始める處に、ペトラルカの最後の地、オノフオリオ(Onoforio)の寺がある。そこには這入らずに丘を下り、城壁の下に出る。聖靈門(Porta S. Spirito)の石は黑くよごれて僅に昔の形を止めて居るが、その邊の貧民窟にも日は照つて柳の綠が美しう、城門のアーチを通して見える。

石の城戸すゝびしそばに、柳葉は

昔ながらのみどり糸たる。

貧民窟を通つて見れば、子供等は塵にまびれて街上の敗石の上で遊んでをる。そこに蜜柑賣りが車を止めて蜜柑を賣る。きたない子供にきたない家、その中にも蜜柑の色は美しう、貧民窟に時ならぬ天上の庵摩果が落ちて來た様に見える。而してこゝらの子供等は蜜柑を皮まで食べてゐる。

聖ピエトロの寺の前に出てそこから電車で家に歸つた。その路ポポロの門の處で、今日は五日目で最後の競馬が濟むだのか、その歸りが人の流れを作つて出て來た。

宿に歸つて見ると思ひがけなく新村君がドイツから來て、名刺を殘して行つた。食後にその宿に訪ねて、久しぶりで大に日本語の話しが出來た。歸りには晝のあつさは去つて夜風が涼しく、くもりはれて星がぎら〳〵してをる。

五月六日、 ファルチシナの畫、ラテラノの寺、檻密顧問、音樂者。

朝飯の後は新村君と一緒に河向ひのファルチシナ(Farnesina)の別莊を見に行つた。この別莊は十六世紀の始め、ルチサンス美術の最も盛な時に、ロマの富豪が建てたものでラファエルの壁畫がある。ラベロの河端、ジャニコロ丘の麓に木立の多い庭を作り、その眞中にこの家を建てゝ天下の豪奢を極めた。建物は古のまゝながら、庭は殆ど壞されて、古木が二三本ある外は、殺風景な草原に加へて、市區改正の結果殺風景な煉瓦塀で圍んでしまつた。廣い玄關にはラファエルがその弟子達を率ひて、天井にアモルとプシケとの古話しを畫いた。人物の姿や顏、それから畫の配合案配はいかにもよく出來て、優美に又派手やかである。然しその全體は若い男女の裸體畫の陳列に過ぎないでその頃のルチサンスの精神がよく現はれてをる。ギリシ

ヤの神話に美しい裸體、それを配合して宮殿を飾るといふ外に特色はない。裝飾としてはいかにも立派であるが、畫が餘り寫實すぎて裝飾美術として想像に訴へる餘地が少い。この傾向が一層進んで一層俗な寫實に墮落するのは自然の勢で、十七八世紀のバロッコやロコッコの裝飾畫が色寫眞の樣になつてしまつた始めはこゝにも已に見える。

次の室には天井の外に四方の壁に同樣の畫があつて、ギリシャの神話の間に山水畫が交つて居る。壁や天井には裸體畫をめぐらして其間に派手な姿の貴族貴婦人が跳つたり、飮んだりしやべつたりした。その奢りの生活の中にも人間はやはり天然を愛する事を忘れ得ないで、せめて壁にでも山水畫を見て樂んだのであらう。然しそれも尙一層墮落すると、十七世紀のフランスの畫や縫物にある樣に、單に山水では滿足しないで、金鞍白馬の貴公子が森の中、

で酒を飮んだり、白髮のかづらに廣袖姿の貴婦人が山の上で跳つたりする畫ばかりになる。人間の精神が天然から離れ始め、天然でない空想を喜ぶ樣になるのは即ち墮落の始である。日本でも光風霽月、花紅柳暗の天然を愛して、禪定三昧の中にも天然を離れなかつた始めの時代の禪畫には生氣があるが、それを型として守つた德川時代の狩野派は、死んでしまつた。德川時代に美術の墮落したのは、室町や桃山時代の樣に天然に接しないで、窮屈な社會の束縛に萬事を支配した結果である。こゝにあるラファエルの畫は固よりそれ程墮落したものでなく、海から生まれ出た女神、それを圍んで居る海女などいかにも活き〳〵として愛らしい。然しその興味は外面に現はれた色と形との美で、その中の奥に潛んだ興がない。ベクリンは同じ樣な畫を澤山畫いたが、その畫には一種の凄味があつて、單に色と形とだけでない面白味がある。ラファエルは畫かきで、ベクリンは詩

人である。ラファエルがいくら名工でも、又他の作はどうにしても、この畵はルチサンスの浮いた精神を表はしたに過ぎない。

ラファエルの畵に對照してミカエルアンジェロが此の室に一つ畵き殘した畵は實に面白い。只一つ大きな人間の頭を黑色で畵いたのみであるが、その筆勢にこもつた勢は、他の壁畵を壓倒して、その黑色は他の美しい色を嘲けつた樣に見える。

この別莊を出て馬車でラテラノに行く。狹い汚い町、それからカピトルの麓、コロセオの前を過ぎて、廣場からラテラノ(Laterano)の寺に這入る。このラテラノは長い間法王の御座所であつた所で、最初のキリスト敎皇帝コンスタンチンがロマの司敎にこの地を捧げてから、ロマの一番大切な寺、後にはロマ敎會の頭の寺になつて、寺格はワテカノの聖ピエトロよりも上にある。先づ堂の奥の丸天井(ヴォールト)の寄石細工は古い作に基いて修覆した畵で、キリストや諸聖

者が、ビザンテン風の固い線で畵いて、その大きな目が奇妙に見えるが、うぶな中に面白味がある。

役僧室の入口には先の法王レオ十三世の墓が出來てをる。大理石の像はまた十八世紀風の派手な彫方を脫しないが、その臺は黑石に多少幽靜の趣を持つた意匠で、他の法王の墓がむやみに裝飾してあるのに比べて餘程墓らしい。その下をくゞつて廊下の先き、內部の小御堂に古畵の奥ゆかしいのがある。それから僧院の廻廊中庭(Chiostro)に這入る。この廻廊はロマで最上のキオストロ建築である。日光がまばゆいばかりに靑葉に照つてをる中庭を圍んで、意匠色々の柱で支へた廻廊が冷かに靜かに、古の僧院の跡を偲ばしめる。柱を飾つた寄石細工などは多くはげてしまつて居るが、或は直、或は蔓卷きの形の柱がづらりと並んで、外部の世界と廻廊の中とに隔てをつけたさまは、どこの僧院も同じではあるが、こゝのは特に奥ゆか

しく、その中に立てば、心は自然におちついて、外の世界から我自らに歸る。禪寺で玄關から書院に連る廻廊は此と同じ意匠で、僧院生活の自然の結果、東西に同じ種類の建築が出來たのである。庭に出て草花をつみ、尙廻廊の內や外にあるあどけない彫刻に七八百年前の世界を思ふて、又元の本堂に歸る。僧院の廻廊から出て本堂の金色の飾り、高い圓柱のづらりと並んだのを見ると、何となく俗世界の臭がする。然し一體にそこらの裝飾は聖ピエトロの樣にペカ〳〵せず、バシリカ建築の特徵である石柱の列も、大理石の小御堂も、割合に落ちつきがある。柱の一つにジオットーの畵といふのがかゝつて居るが、後の人が筆を加へ色をつけたらしい。

建築や裝飾には古い形は殘つてないにしても、此の本堂はローマ敎會の本山として、數百年の前に五度も敎會全體の會議を開いた所。又聖ドミニコと聖フランシスとが初めて逅つて、互に抱き合つて感

涙を流したも此の寺の入口であつたといふ。

北の入口から出て、堂を一週する。日影のまばゆい堂後の庭には白ばらが香つて、その間に白大理石の大きな勞働者の像がある。此は先の法王レオ十三世が勞働者を保護されたのに對して謝意を表して勞働者の寄附で建てたのである。その横の臺からは城壁を越してカンパニアの野原、その先にアルバノの山々を見はらす。壁の廢墟が綠の野原に立つて、野の先は海に連る。初夏の日光が一面に照つていかにも快濶な眺めである。

その庭の横に小な洗禮堂があつて、中には五世紀に立てた柱に圍まれて洗禮の水場がある。小いが形のよく整つた建物。この堂についた橫の小御堂二つは洗禮のヨハヂと福音記者のヨハヂとを祭つて、その一つの入口にある銅の戶は開閉に妙な音を出して音樂を奏する。この戶はカラカラ帝の風呂場の戶であつたと言ひ傳へる

が、いかにも古色を帶びた面白い戸である。重さは二千斤近いといふが、その重みで開閉につれて音樂の様な音を出す。

洗禮堂から他の方には名高い聖梯(Scala Santa)の堂がある。正面はいやな建物であるが、入口を這入つて兩方にキリストの白石像がある。一つはユダの接吻で、キリストの遭難を物語る、作も中々よい。その白石像二つの間に、高く堂の奥に上る階段がある。此が即ちキリストがピラトの審問に答へる時に上つた階段だといつて、それを神聖のものとしてある。此の段は足で踏むで上る事を許さない、膝をついて上る。信者は跪いて此の段を上り、段の上に半ば暗がりの中の燈明を仰いで祈禱をしながら上る。此の前には、夕暮に此處に來たが、殆ど暗がりの階段の先のみに光りがかすかに見えて、その暗がりの中を黒い着物に黒い頭巾を着た婦人が、跪いて上つて行た。暗がりの中に影の様な姿が音もせずに動い

てうご〳〵して、間にはしおやく様な祈禱の聲のみきこえた。その光景は淋しような奥ゆかしい様な感じを起させたが、今日は日中の日が照りこんで、階段もあかるく、人がごろ〳〵して、昔の記憶にあるスカラサンタを壞してしまつた。

午餐の時になるから宿に歸つて、新村君と一緒に食事をし、新村君は又一人で見物に出かけた。

午後はルツァッテ(Signor Luzzatti)氏に面會の約束があるので四時前にその方に出かけた。この人は前に一度大藏大臣でイタリアの財政を整へた功臣で、今は樞密顧問である。その家に行く道はボルゲーゼ公園の路で、今日はその公園に花の競爭がある、その方に出かける人が群集してをる。馬車を一杯花で飾りこれ見よがしに車を馳せる貴族富豪が中々多い。日傘にも花、婦人の帽にも花、車も花、見物人も大分花を帽やボタンにさしてをる。花神の世界が地に下つて

來た樣である。然しやはり地上の世界で塵や砂が立つ、日光は暑い。それにもかゝはらず、見物はのんきにぶら〳〵して、その間に花馬車が行く。大禮服の出來そこないの樣な立派な服裝の憲兵がその間に立つて、此も飾りの一つになつてをる。

ルツァツテ氏の家に上り、案内せられてその書齋に這入る。素質な室に書類をちらけさがして、その間に肥つた赤顏の半白の老人が立つて來て迎へてくれた。この人には閣下といつて物を言はなければならぬと用意をして行つたが、その本人の質素な風で、又親しげに話ししてくれるので、いつの間にか閣下を云ひおくれてしまつて話しをした。一體イタリアはドイツと同じ樣に稱號や尊稱がやかましい國であるが、その中にもこういふ平民的の人もある。こちからイタリアの事について少し問ひかけて、教會と教育との關係に話しの緒をつけた。するとルツァツテ氏は「イタリアには未だ坊主の勢

力が強い、キリスト教は實に寛容の精神を缺いてをる」といきまいてこちらの問に答へるよりも、佛教を賞め、印度や日本で宗教戰爭のなかつた事を賞め出して滔々と話し(といふよりは演說)が盡きない。此の人の此の議論はその演說で已に讀んで知つて居るから、「閣下のその事に關する演說は前に讀んで日本にも紹介した事があります」といふと、愈よ喜んで愈その議論を述べる。こちらの問ひたい事を又と云ひ出す機會を失つて、餘り時間もたつから、辭して歸つた。

歸り路には人の群集が一層多く、砂塵の中で美しい夕日の空も見られない。砂塵の中をぬけて宿に歸り、顏を洗つて一息ついた。

するとそこへ音樂者のコスタ氏(Maestro Costa)が訪ふて來られた。この人は音樂者であるが、浮いた音樂が嫌いで、特にバッハの作が好きだといふ事は豫ねて聞いて居た。こちらから往訪する筈のが、あちらから來られた。イタリア人に珍らしい落ちついた、物言ひのしと

やかな人で、話しが心安く出來る樣に思つて色々話し出した。「西洋の文明をどう觀察するか」と問はれるから「實に活動が多い、多過ぎると思ふ」と答へる。コスタ氏は「自分も今の社會には不滿である。社會ばかりでなく今のヨーロッパの思想感情が浮きすぎてをるからそれにもつと深い趣味を與へたいと思つてゐる。就いては君の意見をもつと詳しくきゝたい、自分は殆ど佛教信者であるから、少しも憚らずに西洋を批評してくれ」といふ。それで尙進んで、西洋の思想が餘りに個人に執着して、死んで後までも身體そのまゝに復活して神の賞をうけやうとするなど、今の活動、競爭、それから資本家と勞働者との爭ひを生ずる本になつたとかと思ふ。今のキリスト教の信仰は、新教は固より、カトリックも、中世の樣な觀念三昧、信心歸敬の祈念三昧を缺く。從つて個人の執着は一方に發達してもそれを制して衆生に同情し、人を思ひやる風に乏しく、個人が自分自身を顧みる

修業をすてゝ、人に對して不平を並べる樣になるらしい。など思つた事を奥底なしに述べる。コスタ氏は「それ等の事は自分も常に考へて居るが、その根本に這入つて、キリスト教と佛教と、どこが違つてそういふ差違を生ずる樣になつたか」と問はれる。「實は佛教の中にも、日本にも此の修養の觀念が段々乏しくなる」といつた。二人は東西共に同じ苦みに會つて居るといふ點で同じ考へを十分に交換した。それから尙靈魂の考へ、音樂の事など話して、夕暮のくらくなるまで快談した。イギリス人特にアッシシで逢つたゴード氏の如き人と話せばイギリスの社會やイギリス人の思想にちやんと具はつて居る美しいものを吹き込まれて、敬服する。今日のコスタ氏は全くそれと違つて、今のイタリアの一般と違つた傾向を持ち、パッパなどのしとやかに高遠な音樂に精神を養つて、それで現今の我利〳〵の風潮に衝突を來してをる人の聲をきく。こちらも同じ樣な衝突の渦

中に居る身で、特に話しが能く合つて愉快であつた。然しゴード氏には始終慰藉を與へられたに反して、コスタ氏には煩悶を與へられた感がする。ゴード氏には敬服する、コスタ氏には同情する。

五月七日、ワテカノ宮廷、ボルゲーゼの園、コルソの通り、月夜。

今日は法王政廳の總理メリデルワル氏(Cardinal Mery del Val)に會つて來た。ワテカノに着いて博物館の見物や、法王に謁見の順禮がごら〳〵してをる間を通りぬけ、廣いゆるやかな石段を上りつめると、そこに宮殿内の廣い中庭。それから赤黄黒の制服着た衛兵の間を通つて二階に上り、案内を乞ふと、此も何だか立派な制服を着た番人が案内して立派な御殿の室を二つか三つ通つて書記の室に入れる。暫く待つてくれといふので、大きな椅子にかけてその室で待つ。

廣大な宮殿の部屋の壁はどこも紅緞子で張りつめ、同じ紅緞子に金框の椅子が並んでをる。欄間に當る處には古畫、その上の天井は張りかへて、中央に今の法王の紋所がいかめしく畫いてある。室の中央には壁の側に黒塗の机があつて金色の十字架を眞中に、その兩方に金色の天使が捧げてゐる燭臺がある。同室には書記の机に一人の書記と、外に待ち合はせの人はアメリカ人らしい婦人が二三人とイタリア人の男が一人。外には音もなければ人影もなく、宮殿作りの室が靜かに、壁の緞子のみ獨り派手やかに見える。暫くして奥の室から一人の高官らしい僧が白袍を纏うて出て來た。人々は前に跪いてその手にキスをした。後に考へるとその顔つきが法王に似て居たが、然し法王が全く一人であるく事もなからうし、白袍の下は黒衣であつたから、法王ではないかとも思へる。總て教會の高僧はどうも顔つきが互に似てをる。又暫くして表の方からどこかの司

敎が役僧を二三人伴につれて來て奥に這入つて行つた。それにつゞいて半白の貴族らしい人が禮服に澤山勳章をさげ、夫人に子供三人つれて來て、それも奥に這入つて行つた。その娘等の青白い顏に眞白の着物を着て、黑衣の老婦人と共に赤緞子の部屋を通つて行つた樣はどうしてもイタリヤの宮殿の光景である。椅子に憑て瞑目して大分待つてをると、書記の處に呼鈴が鳴つた。書記は奥に行つて又出て來て自分の前に來て恭しく次の部屋に案內してそこの椅子で暫く待つてくれといふ。この室も裝飾は同じであるが、一層大きくて、眞中の大きな机を圍んで大きな椅子が十二三並んでをる。即ち政廳でカーデナル(參議)の會議室らしい。而してそこに先に來た司敎の伴の役僧が立ち話しをしながら待つてをる。きくともなしにきけば、話しはドイツ語で……今までの法王は……謁見……威勢が增して……などの言葉が切れ〳〵にきこえる。何か

多少の不平があるかと思へた。その中に司敎は出て來て伴の僧と共に去る。暫くして先の貴族の一行も出て行つた。役僧の案內で次の部屋に這入る。裝飾は同じであるが先の書記室よりも小く、机の上には事務の書類があり五十を少し過ぎたかと思へる、品格のよい人が一人きり居る。その人が卽ちカーデナルのメリデルワル氏で、愛想よく迎へて、ボストンのオコンチル大司敎の事や日本の話しに移る。デルワル氏は英語の出來る人とはきいて居たが、その如何にも立派な英語を話されるには驚いた。その上秘書も何もなく、一人でこの室に居、一人で色々の人に應接をする。定めてフランス語でもドイツ語又はイスパニア語でも同じ樣に上手で、誰れが來ても差支ないものと想像せられる。多少日本の話しをして、それからローマの敎會關係の事業を見せて貰ふ事を賴んで、挨拶をして出ると、室の口まで送つて來て、萬事便宜を計ると繰返して約束された。會見

するまでには色々にこの人を想像して居た。或る人や、新聞はこの人を一種の奸物で一人で法王をまるめてワテカノの政廳を我が物にしてをるといひ、又他の說では愚物で、ジェスイトの手球に使はれてをるともきいた。一度會つただけでは固より斷定も出來ないが、この二十分ばかりの會見で得た感じでは、奸物でもなければ愚物でもない。才略はどうか知らぬが、人間は立派な人物で、眞面目な人の樣に見えた。その外交官風に應接の上手なのは固よりカーデナルとしての長い經歷の自然の結果で、それも無理に愛嬌を作つたりお上手を使ふのではないと感せられた。

ワテカノの宮殿を出て宿に歸つた。途中でも、又宿に歸つても今日の午前のワテカノ行きを考へると、今日は實に今までにない新しい經驗をした。王侯の宮殿は見た事もない、日本でも大臣に會見した事もない自分は、今日始めて活きた宮殿生活を見た。又政治上に

は力は薄くとも、世界の人心の上に大勢力を持つてをるワテカノの總理大臣に會見をした。世間には我々の樣な中等の通常の生活もあれば貧民窟の悲慘もある。それと反對に又勢力と財とを集めた宮殿の生活もある。今の社會には貧民の不平も多ければ、權勢富貴の爭ひも多い。我々は貧民の悲慘がないから、我々の力で、敎育なり慈善なりで貧民を救ふ必要がある。下等社會と上流との間に立つて兩方の通辯になり、調和になる義務がある。我々は權勢富貴を爭ふ必要はない。それ故その平和の生活、和樂の生活の心を推し擴げて上流の人々を救ふ位置に居る。下層の不平家は無政府主義などになつて宮殿生活を破壞しやうとし、上流の人は此等の人民に同情をせず、成るべく踏みつける樣にする。その間に立つて我々中等社會の人民は大きな仕事をしなければならぬ。こんな事は誰れでも說き又知つてをるが、今日宮殿を見て直接に切實に感せら

れる。

尙一つは法王と信者との關係で、カトリックの志ある人々は、法王が一層信者に近く事を希望してをる。又新敎の人たちは、法王を罵つて、獨り尊大をきめ込んでキリストの趣意を失つたといふ。何れも一理はある。然し今のワテカノを見ると、此等の希望や攻撃に對して、法王の現在の位置態度には又已むを得ない點もあると考へられる。現在だけでも順禮のローマに來てをるのが數千人はあるそれ等は皆一度でも法王に會ひたがる。それを自由に會ふ樣にしたら法王はたまつたものでない。從て公の謁見には時間を定めて、何十人なり何百人を一時に引見する必要が起る。多數が一時の謁見であるから、それらに一々言葉をかける事も出來ない。法王がいばつて言葉をかけないのでなしに必要から來てをる。此れだけの組織になればそれに應ずる制度を要する、制度があれば役人がある。又

は意見の衝突などに僧侶が法王と直接談判をしたがるものがあつても、そう一々直訴を許す譯にもゆかぬ。キリストの跡つぎでも一キリストの通りにする事は出來ぬ。此等の點から見ると現在のワテカノの制度は必要から起つた點が多いと考へられる。ワテカノの宮殿の莊大なのを見て、直にキリストはあんな宮殿に住むで居なかつたといふのは酷評である。然し只一つ法王が領地を失つたからといつて、イタリア王の領地には足踏みせぬときめたのは、先にも云つた樣に狹量といふ外ない。フォガッツアロなどがそこに苦心して、法王と政府との間を調和しやうとするのは同情すべき事で、政府も亂暴をやつたが、法王の方でも光風霽月になつたら、イタリアの人民に大きい幸福にならうと考へられる。

午後は四時頃に外出して、ミスダヴ (Miss Dove) を訪ふた。その姪と姪の婿のレンドラム氏といふのも來て居て、茶の上で暫く話しを

した。このレンドラム氏はアメリカで横井君に會つたといつて、それから本郷教會の話しも出た。どこで誰れの知り合に遇ふか、世界は弘くて狹い。ミス、ダヴの家を出でゴートのお母さんの宿に行つたが、外出中で會へなかつた。

城門を出でボルゲーゼ(Borghese)の公園に行つた。松の木蔭、青草の上に子供等が澤山遊んでゐるのが實に可愛い。パリの樣にデアボロ遊びの子供は多くないが、飛んだりはねたりして、和らかなイタリア語をしやべつて、黒い毛や赤い毛の子供等が遊ぶ。草の上に坐つて子供等を見て、それから又散歩。松林の盡きる處に白石でゲーテの紀念碑といふが建つてをる。誰れが造つたのか知らないが恐ろしい目つきのゲーテで、何か軍人の像かと思つた。ゲーテが三十四の時にロマで彫らせた像のゲーテは殆どギリシャの神樣の樣な顏をしてをる。それに反してこゝのゲーテは泥棒の樣な目を張つ

てをる。此の紀念碑はドイツからロマ市に寄贈したのださうだが、近頃のドイツ人の見るゲーテはこういふ恐ろしい人間かと驚かれる。

木蔭の道にはひるからの散歩の人が多い。婦人の流行着には薄紅や薄紫が多く、顏色の少しあをざめたイタリア婦人が薄紅の帽子の上に赤の傘をさしてゐるので顏色が一層變に蒼く見える。その流行着の派手姿の間には、田舍から來た人々が濃い赤黒縞の模樣の襟まきをかけてをるのもあれば、男には赤や樺の派手なチックタイも多い。その間に又青や紅の縁をとつた黒い制服に、黒い僧帽を被ぶつた宗教の學生が三々伍々連れ立つてあるく。春と夏の初とにはこの公園はロマの風俗展覽會のやうになる。

松林から西の方には、古い小な競馬場があつて、そのぐるりの石の棧敷は古代の廢墟の樣に見えるが、そこに腰をかけてをる人、競馬場

の芝草の上に遊戯をしてをる若い男女。棧敷のぐるりには笠松とシプレスの綠。こゝにも色々樣々の世界が一つになつてをる。その先湖水の邊りも同樣。どこに行つても木立に草花、派手な姿の男女老若に目立つ制服の宗教學生、その間には例の慈兵の禮服姿。ア グチルが云つた樣にロマはどこまでも色の世界、眼の國である。競馬場から湖水の邊、それからエジプトまがいの石門、並木の道を行くと、六年前に來て見た記憶が處々で呼びおこされ、昔に歸つた氣がすると同時に、又その時の秋の淋しい空と、今日の賑ひとが全く反對の感を與へる。

公園の出口からポポロの門を市中に這入り、その本通りのコルソを行く。こゝにも風俗の展覽。見せびらかしの行列、用事もなくぶら〳〵と人を見てあるく人間、馬車に自動車。大通りとはいひながら狹い町は人と車とで一杯になつて、その兩側の高い家の間にロマ

全體の人が集まつたかと思へる。このコルソ通りの散歩はロマ人の第一の樂みだそうで、此れといふ事もなく、毎日同じ樣に馬車を驅つてこの通りを往復し、人を見たり人に見られたりして、それが無上の樂みになるとは不思議な樣である。この風は古のロマ以來の遺傳である。貴族のお嬢さんが毎日帽子や着物を代へてこの通に現はれ、若い士官は髯をつり上げてめかし込んでこゝに來る。それが即ちロマの上流社會の見合ひ場處で、毎日こゝで會つて互に知り合になつて結婚するのも多いといふ。狹いコルソ通りのこの景色の中には、奢り、見え、欲、色々の心が集まつてをるのである。

夕食の後に新村君がやつて來て、一緒に散歩に出、エチチアの廣場でビールを飲んで月を眺めた。大空の月はどこの國も同じである が、古い石の宮殿の屋根、今建てかけてをる紀念碑の此も石の柱。四方八方石の外に何もないこの廣場から月を見ると、月も何だか固く

なつた様な氣がする。松の木の間の月、蓬の窓から見る月には詩趣があるが、こゝの月は人間の驕慢心に捕はれて悲んでをる月の如く見える。石造の家は便利の點もあり、又安全でもあるが、それと同時に人間の執着心を增す。結べば柴の庵、解けば元の野原の、木や竹の家に住む日本人の心がさらりとして執着驕慢嫉妬の强い西洋人と違ふのが、この家造りにも表はれるかと思はれる。古のロマから今日のこの大紀念碑を建てるロマまで、この地の人間は、人を自分に屈服しやうとする欲。自分の野心のためには人を苦めでも殺しでもする盛な强欲慳貪。それ等の歷史がバラテノを始め、この石の宮居、石の紀念碑、石の柱、石の段に跡を殘してをる。角に切つた石を積み上げた中に大空の月を見て特にこの感が强くなつた。

新村君はあすロマを去るので、互にライプチヒでの再會を約束して宿に歸り、宿の屋根に上つて又月を眺める。こゝも後には王宮の

石の高塀、前にも石の宮殿。然し上を仰げば、大空の澄み亘つた中に月は靜かにしとやかな光を放つてをる。

五月八日、アメリカ學院、オステア街道、城外の聖ポロ、詩人の墓、テスタッチオの丘。

アメリカ學院の長のケンヂー氏(Monseg. Kennedy)に會ふ約束があるので、十一時前にその方に行つた。王宮の高塀の下に沿ふ路の一方は、天をつく石垣、石塀に、その向ひは貧民窟。小な青物市場で馬の倒れて騷いでをる上に王宮の窓から、それを見下してをる人の頭だけ見える。トレヴ非の泉(Fontana bi Trevi)には水が迸つて熱鬧の市中に清い水を湛えては居るが、そのぐるりは塵とガヤ〳〵いふ聲との世界。イタリア人のガヤ〳〵大きな聲で、通常の事を話すにも、家の內外のかまいなく、喧嘩かと思はれる樣にしやべるのが、ロマの町

の砂塵と一緒になつて、最も不愉快を増す。イタリア語は詩で讃めば美しい、歌できけばいかにも柔かいが、その言葉でも下卑に話せばやはり下卑で騒がしい。

學院の中は、別世界で、日が朗かに中庭の木立を照らす。案内せられて院長に會ひ、學校や教會の事を少しきく。その中にソテカノから案内に差し向けられたテンピエリといふ僧も來て、見物參觀の順序を定めて後、辭して歸つた。歸りは王宮の前の方を通る。日中で人通りも少く、只憲兵の巡廻のみ目につく。王宮の赤い樣な壁にも敗石にも一杯に日が照りつけて、いかにも暑い。餘りの暑さといやな乾いた風吹きとで日中は休んで、四時近くから城外に出た。

テベロの河端、アヴェンチヌ(Aventine)の丘の下から聖パオロの門を出る。昔からのオステア街道で、兩側の並木が遠く連り、その間に處々葡萄酒の店がある樣はローマ郊外どこでも大抵同じ景色。道傍に小

山の迫つた處に大きな殺風景な寺。壁に柱と窓とがづらりと並んだ樣子は鐵道のステーションかと思べる。此が即ち「城外の聖パオロ」(S. Paolo fuori le mura)といつて、聖ポールの殉教の紀念に出來たのである。傳説では、使徒ポーロの殺されたのは此の寺の東、小山の中にあるといふ。そこには今も尚僧院があるが、その近傍でオステア街道の路傍に尸骸を埋めて、そこにこの寺が出來た。寺の起源は古いが、建築は近くて火災の後にやつと出來上つて、一部分はまだ工事中である。內部はバシリカ風で幾十本となしに大きな石の柱が並び、その上に金の飾りの天井、欄間の樣な處に教會の大切な人々の肖像を畫いた寄石細工。大きくて手は込んだものであるが、趣きもなく有りがた味も少ない。堂の前になる西側には泉を作るために、四角の空地を圍んで同じ樣な石の柱を並べ建て、盛に工事をやつてをる。この建築を見て昨夕石造の家に

ついて考へた事が一層深く感せられる。献身の殉教者ポーロの跡を傳へる建築には、その信仰と熱誠とを代表する様な意匠の出るべきのが、只多くの金を集めて壯大な建物を作り、石の柱を建てつらねる。その心根はどうしてもロマの古に皇帝等がその威勢を示すために自分の宮殿や、神殿や、又バシリカを建てたと同じである。この堂を外から見ては大きい壁、中に這入れば冷かな柱の行列、ポーロの事など考へにも上り得ない。中にポーロの石像はあるが、その他は法王や學者の肖像が石の間にいくつとなく列んでをるのみ。

この寺の中にも古代の寄石細工のキリスト像が殘つて、ビザンテン美術の可なりな作である。火災を免れた分には、僧院の中庭や、その邊の小御堂がある。中庭は中々によいが本堂の殺風景にいやな氣がして、よい加減に見て出てしまつた。

並木の街道をあるいて城門の方に歸る。路傍の小な堂の入口に

ポーロとペテロとが相擁してをる小な石の彫刻がある。此の處で二人の使徒が各死を覺悟して、互に相擁して涙の中に告別した處だと云ひ傳へる。昔を思ふと、このオスティア街道の光景が偲ばれる。地中海の何れの領地に出るにも、皆オスティアの港から船出をしたのであるから、ロマとその港との間の通路であつたこの街道の繁昌は想像以上で、ロマ帝國の南半分はこの街道を通つて首府に往復したものである。軍人、商人、官吏、あらゆる種類の人がこの街道を通つた數はいくらになるか。使徒ポーロも始めてロマに來る時にはこの道を來て、最後に殺される時には城門を出、この街道を引つぱられて來たのである。

城門に近くに從つて、その傍にある石の三角塔(ピラミド)、ついて城壁の上からシプレスの木立が面白い眺めをなす。昔はこゝの城門外の眺めが實によかつたそうであるが、今はそのあたりに貧民の